

中国・中日医学教育センター
巡回指導調査団報告書

平成3年11月

国際協力事業団
医療協力部

103 / 1^o / 7 / net

JICA LIBRARY



1095579(7)

23247

中国・中日医学教育センター
巡回指導調査団報告書

平成3年11月

国際協力事業団
医療協力部

国際協力事業団

23247

序 文

中国医科大学においては、独力により日本語による医学教育を継続してきたが、教授陣の高齢化、新しい教材、及び教育研究用機材の不足から十分な教育効果を上げ得ない状況にある。

かかる事情を背景に、同大学は中国政府を通じ我が国に対し、日本語による医学教育の充実を目的としたプロジェクト方式技術協力を要請越した。

右要請を受け、国際協力事業団は、平成元年11月に実施協議調査団を派遣し、同調査団と中国側関係機関との間で本件実施に係る討議議事録（R/D）及び暫定実施計画（T S I）を署名・交換し、平成元年11月18日から5ヶ年にわたる協力を開始した。

今般、本プロジェクトの進捗状況の把握及び今後の技術協力計画策定のため、慶応義塾大学医学部安田健次郎教授を団長とする巡回指導調査団を平成3年10月4日から10月12日まで現地へ派遣した。

本報告書は、右巡回指導調査団が実施した調査及び協議内容とその結果につき取り纏めたものである。

ここに本調査にあたり、御協力を賜った関係各位に対し、深甚なる謝意を表するとともに、今後とも本件協力事業の成功のため、更なる御支援をお願いする次第である。

平成3年11月

国際協力事業団

医療協力部長

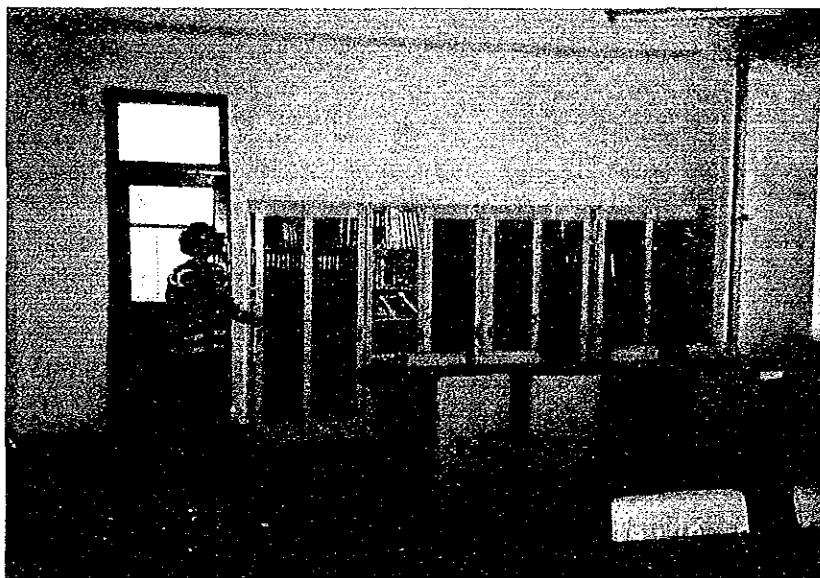
曾 我 紘 一



核医学の講義風景

(講義は専門家の指導により
作成されたマニュアルを参考
に日本語で実施されている)

学生達に利用されている
平成2年度供与機材



学生用図書室

(到着した教科書類が保管,
利用されている)

国家科学技術委員会を
表敬訪問



中国側との協議
(中国医科大学内会議室)

調査団員と派遣中専門家
(中国側との協議を終えて)



目 次

1. 巡回指導調査団派遣	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 調査団の構成	2
1-3 調査日程	2
1-4 主要面談者	3
2. 要 約	5
3. プロジェクト実施上の諸問題	6
3-1 プロジェクトの進捗状況	6
3-1-1 カリキュラム開発	6
3-1-2 教材開発	6
3-1-3 教授法開発	8
3-1-4 専門家派遣	9
3-1-5 研修員受入	11
3-2 問題と対策	12
3-3 供与資機材の利用状況	13
4. 指導内容	15
4-1 日本側のとるべき対応策	15
4-2 現地のとるべき対応策（含む技術指導）	15
5. 合同委員会の協議事項	17
5-1 経緯と概要	17
6. その他の事項	18
6-1 臨床指導	18
6-2 共同研究	18
6-3 技術普及	18
6-4 中日医学教育中心附属病院関係	18

附属資料	21
① 巡回指導調査団対処方針（案）	23
② 会議議事録（日本文および中国語文）	27
③ 中国側提出の技術協力実施概況報告	36
④ 教材開発に係るアンケート結果	52
⑤ 機材台帳（供与機材及び専門家携行機材）	89
⑥ 供与図書目録	107

1. 巡回指導調査団派遣

1-1 調査団派遣の経緯と目的

中国医科大学（遼寧省瀋陽市、北京より空路約1時間）はその前身が満州医科大学であり、戦後も引続き日本語による医学教育を実施してきた。

しかしながら教授陣の高齢化、新しい教材の不足、さらに新しい教育研究用医療機材の不足などにより十分な教育効果を上げ得ない状況にあった。

同大学は我が国の大学等との民間レベルでの交流は以前から行われてきていたが、系統的なものではなく、個々別々に実施されていた。

かかる事情を背景に、中華人民共和国政府は同大学に対する日本医学教育の充実を目的として、昭和63年8月に正式に我が国に対し技術協力を要請越した。

右要請を受け、国際協力事業団は、本件協力要請の背景、先方実施体制の調査等を目的に昭和63年10月に予備調査団、そして本件協力の必要性、妥当性、及び協力を実施する際の具体性の調査を目的に平成元年4月に事前調査団、更に前記調査の結果を踏まえ、技術協力プロジェクトを発足させるため同年11月に実施協議調査団を派遣し、同調査団と中華人民共和国政府機関代表者との間で同年11月18日に署名・交換された討議議事録（R/D）及び暫定実施計画（TSI）に基づき、5か年間の技術協力が実施される運びとなった。

本件協力事業は中国医科大学内に日本語による医学教育の充実を図るための施設（中日医学教育センター：平成元年11月18日設置）を設置し、人材の養成に係る技術協力を目指すものであり、具体的にはカリキュラム、教材、教授法の開発を通じ日本語による日本医学教育に携わる人材の養成及び医学教育の充実を図ることとしている。

プロジェクト開始から本調査団派遣に至るまで、すでに長期専門家2名、短期専門家14名を派遣し、10名の研修員を受け入れ、175,000千円の機材供与を実施してきている。

今回、巡回指導調査団を派遣し、技術移転の進捗状況の正確な把握と実施上の課題等を調査、検討し、平成3年度後半以降の協力計画策定の為の指針を得るとともに、先方実施機関関係者との協議を通じ、R/D、及びTSI締結後の実施計画の妥当性を検討し、プロジェクト協力の適正化を図ることとした。

またプロジェクト開始後2年近くが経過したことから、所期に設定されたプロジェクト実施計画（各科別及び全体的な活動内容と到達目標）の妥当性、及び先方実施体制の調査、確認を行うなどの形で中間評価的な役割も担うこととした。

具体的には、下記諸事項につき調査、協議することを目的に、平成3年10月4日から10月12日まで慶応義塾大学医学部教授安田健次郎氏を団長とする巡回指導調査団を現地に派遣した。

1) プロジェクト協力計画内容に係る進捗状況及び今後の方針

- ① カリキュラム開発
 - ② 教材開発
 - ③ 教授法開発
- 2) 技術協力計画の進捗状況及び今後の計画
- ① 専門家派遣計画
 - ② 研修員受入計画
 - ③ 機材供与計画
- 3) 臨床指導・共同研究に係る計画
- 4) 技術普及（他の関連機関との交流・連携）に係る方針

1-2 調査団の構成

	氏名	担当業務	所属先
団長	安田 健次郎	総括	慶応義塾大学医学部 教授
団員	阿部 圭志	内科分野	東北大学医学部 教授
団員	増田 康治	外科分野	九州大学医学部 教授
団員	荒木 進一郎	協力計画	文部省医学教育課病院第二係 係長
団員	東城 康裕	業務調整	国際協力事業団医療協力部医療協力課 職員

1-3 調査日程

10月4日	10:00	成田発（JL781便、安田団長、阿部、荒木、東城職員）
(金)	13:15	北京着
	16:30	日本大使館表敬
	17:15	JICA中国事務所表敬
10月5日	9:30	国家科学技術委員会表敬
(土)	11:00	衛生部表敬
	14:40	増田団員北京着（NH905便）
10月6日	16:40	北京発（CJ6102便）
(日)	17:50	瀋陽着
10月7日	9:00	中国側との協議
(月)		① カリキュラム開発
		② 教材開発
		③ 教授法開発
	14:00	中国側との協議
		① 臨床指導・共同研究

		② 技術普及
		③ 専門家派遣計画
10月8日	9:00	中国側との協議
(火)		研修員面接・選考(安田団長、阿部、増田団員)
		供与機材内容(荒木、東城団員)
	11:30	日本領事館表敬
	14:00	合同委員会開催
	16:00	会議議事録作成
	17:30	会議議事録署名・交換
10月9日	9:00	供与機材の稼働状態の調査、確認
(水)	10:30	講義風景視察
	11:00	中国医科大学内施設及び付属病院の視察
	13:30	安田団長講演
10月10日	8:40	瀋陽発(CJ6117便)
(木)	9:50	北京着
	11:00	中日友好病院視察
	14:00	資料整理
10月11日	9:30	JICA中国事務所報告
(金)	11:00	日本大使館報告
	15:00	北京発(JAL782便、安田団長、阿部、荒木、東城団員)
	19:55	成田着
10月12日	8:25	増田団員北京発(CA953便)
	(土)	

1-4 主要面談者

(中国側関係者)

(1) 中国医科大学

李厚文	中国医科大学	学長
孫開來	"	副校長
金魁和	"	"
吳国宝	"	校長助理
突永恒	"	校長秘書
王振剛	"	外事处处长
張弋	"	教務处处长

(2) 衛生部

高 細 水 衛生部外事処副司長
李 忠 金 ” 官員

(3) 国家科学技術委員会

張 慧 春 日本処処長

〔日本側関係者〕

(1) 日本大使館

荒 義 尚 公使
小島 高明 参事官
柿原 洋二 二等書記官

(2) 瀋陽総領事館

高橋 迪 総領事

(3) J I C A 中国事務所

三浦 敏一 所長
松谷 広志 次長
岡田 実 所員

(4) 派遣中専門家

長野 政雄 長期専門家 (チーフアドバイザー)
立場 正夫 ” (業務調整)
山本 慧 短期専門家 (薬理学)
佐々木 毅 ” (腎内科)
田中 雅夫 ” (一般外科)

(以上中日医学教育センタープロジェクト)

松鶴 甲枝 長期専門家 (看護)
川鍋 佳子 ” (業務調整)

(以上中日友好病院プロジェクト)

2. 要 約

プロジェクト開始後2年を経た時点で、発足当初からの協力計画内容である「カリキュラム、教材及び教授法の開発」は一応順調に進んで居り、その後加わった「臨床指導および共同研究と技術普及」の協力内容は前三者の進行に伴って漸次推し進められている状況にある。専門家派遣については、専門家の努力により現地に於て高い評価を得、又感謝されて居り、各専門科目毎に有益な指導が行われているが、派遣時期・期間等に再考慮の余地がある。研修員受入れも計画通り毎年5名ずつ行われて居り、第1年度の研修員が帰国しているので、研修成果の本国における反映を期待している段階である。供与機材は、昨年度分までが到着し実際に使用され始めた時点であり、教育の基本機材が充実し始め、最も劇的に効果が認識出来る。今後、有効な利用と確実な管理が求められるところである。総じて現地では本プロジェクトは順調に進展して居ると受け止められて居り、その主な原因となる長期及び短期派遣専門家の努力が高く評価されている。

3. プロジェクト実施上の諸問題

3-1 プロジェクトの進捗状況

3-1-1 カリキュラム開発

当初、急激なカリキュラム改訂は混乱を招く恐れがあるので、衛生部及び国家科学技術委員会の指導指針に沿った線で充実を計る方針であった。派遣専門家はそれぞれの担当領域でそのカリキュラムに大なり小なり指導をされていると推察され、形として表に現われなくとも充実度を高めていると推察される。その中で、具体的になったものが麻酔学の独立と授業時間増及び、脳外科の授業時間増であると理解される。今後共にカリキュラム開発を評価する場合には、従来の様式における内容の充実度と新しく改善した点の二点から論ぜられる事が望ましい。今回提案した科目は診療科学である。この分野は大学の教育科目としては診断科学であり、病院の組織及び機能としては中央臨床検査(部)である。プロジェクト開始前も、また今回の調査時においても、各種検査等はそれぞれの診療科(教室)が行って居り、検査技術の改善はその教室の努力によるしかなく、又、一医師としては自己の教室のデータ以外のものも総合して診断に役立てる事が出来ない事になる。教育科目としての診断科学の独立が望まれるところである。

衛生部および国家科学技術委員会は医学教育に関して、大綱は指示するが、時間割等の詳細については各大学に任せる方針をとっている事を確認したので、今後は、カリキュラムを部分改善のみならず総体的に見直して改める事も可能である。現在、2年を経過し徐々に改善の方向をとっている。この際、プロジェクト終了時にあり得るカリキュラムの最終案を、そろそろ考える必要がある。その折には日本及び世界のレベルのものであるべきである。カリキュラムが紙上の計画に終らぬ様に、授業の実施面を充実する事が望まれる。今回の短期の調査では一科目の講義のみしか参観出来なかったが、次の諸点を配慮する事が望まれる。①教授陣の日本語使用の頻度と意欲、②学生の授業中の日本語理解度、③学生のノートへの筆記の量と質、④ノートに日本語で記載するか否かの調査とその必要性の検討、⑤黑板に書かれた事項と耳から入った事項の受取り方の差、⑥学生は受身に授業で習った内容を理解するのみならず、自主的な知識獲得型に向っているか否か、⑦一般にカリキュラムの内容は少なくとも基礎医学系においては講義と実習はどちらに主体をおいているか、⑧中国医科大学側は、今迄のカリキュラム開発についてどの様に感じているか、⑨今後は今迄の様な漸時改善を求めるか急速な改善を求めるか、⑩「日本語による医学教育の実施」と「日本の医学教育を、主として日本語で実施する」とのどちらを主体とするか。

3-1-2 教材開発

本来、教材開発は、教科書・参考書・実習指針等の書物のみならず、科によっては実習資料の整備・充実、ビデオテープの選択、その他直接に教育に関する方法又は物が含まれる。

しかし乍ら現時点の中国側の意識は所詮「教科書」の作成に集中していると思われる。教科書の作成については、以前から中国側と日本側との間に理解の差があった。中国側内部にも、又、日本側内部にも理解の程度に差異が認められていた。

- ① 理解の差異が生じた主な理由：「教科書」の定義と使用方法における差があった。中国側が初めに期待していた教科書は厚い単行本であり、日本の小・中学校の教科書の如く、それを読んで覚えれば、この分野に関する知識を全部カバーするものであろう。それでは、現在中国にある統一的教科書の日本語版にほぼ近いものとなろう。それに対して、日本側で言う教科書は、現在では教科書という名を用いても大学に於ては、参考書であり、大学教育において一冊の参考書を丸覚えすればよいという方法は、今日ではどの大学でも医学部に関する限りとっていない。勿論科によっては基本となる教科書（参考書）はあるとしても、それ一冊では済まない。講義において話された事がその教科の中心であり、教科書は、教員及び学生にとって参考にするべき資料の一部に過ぎないと申して宜しいであろう。ここに中日両側間の基本的な理解の差がある。
- ② 日本では、一つの教科書を一人で執筆する事は少くとも2～3年かけて資料を集めて成される事であって、気の重い仕事である。簡単に全科一斉にこの様な仕事が進行するとは思えない。即ち、大事なプロジェクトである事は自覚しながらも、日本側の専門家はこのプロジェクトの為にのみ、教科書を執筆する事は負担が重過ぎると感じていた。反面、中国側は、日本の専門家が厚い教科書を作ってくれる事を期待していた。
- ③ 教科書の定義、使用法の差が指摘され始めてから、日本側は、厚い定本ではなくマニュアルを書く事とし、これをもって教科書に振り替えた。しかし、マニュアルの内容に一定の基準が示されず、日本側も、又、中国側もやや当惑しているのが現状であろう。
- ④ 今回の調査に先立ち、立場調整員に、教科書開発に関する中国側の反応をアンケートの形で調査して頂いた。結果は大別して次の様に分けられる。

- ・ 日本のカウンターパートと数回原稿を往復している。
- ・ 日本側の返事を頂いていない。
- ・ マニュアルだけでは講義の材料とはならない。日本語の本が欲しい。
- ・ 中国の教科書と平行した内容のマニュアルにしてほしい。
- ・ 既に特定の日本の教科書を教材として教えているのでマニュアルは必要ない。

以上の反応から推察すると、やはり日本語で書かれた定本が求められて居り、又、マニュアルの使い方に戸惑っている様に思われる。

<今回中国側と話あった内容>

- ① 教科書の定義と使い方に両者間に差があった事を相互に認識した。
- ② マニュアルは、講義指針又は講義提要の様なものであって、その領域の内容を隈なく網羅した定本ではない。又、日本におけるその領域の講義録でもない。

- ③ 中国側はなるべく詳しいものを再度求めた。
- ④ 日本側としては、マニュアルの使い方の工夫をお願いしたいと申した。即ち、講義の要点・項目はマニュアルに沿うが、教員はその項目に内容を付すべく準備し、それを講義する。学生はマニュアルを見ながら講義で加えられた部分をノートしておく。そして、聞き取れなかった部分、よく理解出来なかった部分、更に深く知りたい部分、或は見たい図譜等があった場合には、図書室で教科書として寄贈又は購入してある本を見て知識とする。日本ではこの様な習慣がある事を伝えた。
- ⑤ マニュアルの内容の標準化は現時点では無理である。そこで次の様なスケジュールとして調整した。
- 第一校は内容不揃のまま作成 : 1992年3月まで
第二校は第一校を改訂 : 1992年12月まで
- ⑥ 各科で指定する既成の小型教科書で代行する事も考えられる。但し、多くの日本の教授は、この様な小冊子を使う事を好まない。

<その他>

- ① 日本語クラス学生用の図書室が新しく用意された。約30人使用が可能。夜9時頃まで使用を許す予定。現在までに到着した教科書類が金属製戸棚に保管されてあった。自由貸出しには問題があるとの事であったが、大学図書館を学生が使用出来ない以上、現時点では大きな進歩である。但し、一科目につき2~3種類の本しかなく、又、一種類につき3冊前後しか揃っていないので、更に多様に、且つ、冊数を増す事が要望された。
- ② ビデオで教育出来る部分は、ビデオを送付する事が適当であると判断された。既成のスライド、ビデオのリストアップが望まれる(例:肉眼解剖学、組織学等)。一応中国側のリストが提出されているが、内容がどの程度であるかが不明である事と、果して、どの程度有効に使われているかの点が不明である。

3-1-3 教授法開発

最近「臨床通論」及び「C. P. C.」が導入され、一教室の枠を越えたシステムが発足し、現地では熱心に取り組んで居り好評であると聞いた。今回の調査団からは更に「G. R.」、「自主学习」及び「E. E. P.」が紹介された。前二者と同様にこの三種も、短期又は長期派遣専門家が現地に於て具体的に計画と実施の指導を行う事が望ましい。自主学习は教育科目として直ちに取り入れる事もよいが、むしろ学生に「講義で聞いた事或は既成の教科書に書いてある事のみを暗記する事も大切だが、自分から知識を求めて勉強する習慣を養う事」を求める必要がある。個々の教育科目については短期専門家の指導を頂けるが、医科大学の教育方針及び計画全般に亘って検討する機会を持つ事が望まれる。その内容は次の如くである。

- ① 教育法の充実を前提とした上での、全体のカリキュラムの再検討。特に基礎教育、医学基礎教育、臨床医学教育、日本語教育、その他の外国語教育等の授業時間上のバランスの問題等で

ある。この目的の為には、国内委員会内に専門委員会としてカリキュラム委員会を作るか、国内委員会自身の議題の中に「カリキュラム全般の再検討と新しい可能性の模索」を入れて、ここ2年の経験を生かし、3年後のプロジェクト終了時までにとまとめる様な計画とするのも一案であろう。但し、中国側と常に相談しながら案を作る事が望ましい。

② 「日本および諸外国における医学教育・医療の一般的傾向」についての情報を教員に紹介する。今回は時間を見つけて、次の内容の講演会を持った。質疑もあり、熱意が感じられた。複写の作成も迅速であった。

A. 九州大学・東北大学・慶応大学の教育内容の紹介と説明

全国医学部長・病院長会編の「医学教育カリキュラムの現状」(1989)の資料を複写して参加者約100名全員に渡し、且つ、用意していったスライドで説明した。

B. 次の諸項目を話題として話した。

- ① 授業時間の傾斜配分：講義時間の短縮化と実習時間の増加
- ② 学生に自主的に学習させる傾向：物事の自主解決能力の涵養
- ③ 新しい医学教育法の開発：ニューパスウェイ、M. D. -Ph. D. コース、チューター制等
- ④ 進学課程と専門課程の境界の撤去
- ⑤ 医学教育内容、方法、カリキュラム作成における弾力化：画一性の排除
- ⑥ 医の倫理、医師としての社会的責任の自覚の養成：死の判定、臓器移植等
- ⑦ 長寿と年齢分布、人口問題への対応
- ⑧ 医療管理、医療行政についての教育
- ⑨ 医療費の問題：社会保険制度との関係
- ⑩ 医療過誤：対策と医師の保護
- ⑪ 日本の医学生、医学部の教員の一日のスケジュールの紹介

3-1-4 専門家派遣

国家科学技術委員会を表敬訪問した折に張慧春日本処処長より、短期専門家は3ヶ月滞在して頂けないかとの緩い要望があった。同様の要望は中国医科大学との打ちあわせ会の折にも出された。今日まで延べ14人の専門家が貴重な時間を割いて渡中し、日本とは相当異なる生活環境の中で教育を中心に指導して下さった事に中国側は確かに感謝の意を表しているが、反面、遠慮がちに出したとは言え、この様な要望が出た事は意外であった。R/Dの時点で、既に双方の理解を得ている事であるので、約束の履行を求めている要望なのであろうか。真意がよく理解出来ない。今回行った会談の内容は次の如くである。

① 3ヶ月滞在が日本人専門家にとって負担となっている事の説明

- a) 教授・助教授・講師・助手等の教育要員は、自己の大学の教育、研究及び研究指導、診療の活動において極めて多忙であり且つ責任が重い。
- b) しかも講座又は教室の構成員数は限られていて、米国や一部の中国の大学の様に複数教授

制ではない。

- c) 研究活動・学会活動・対外的各種委員会活動を3ヶ月中断する事は、少くとも講師以上の教員には可成の犠牲を強要する事になる。
- d) 中国側の授業の時間帯にあわせて渡中する事は、常に可能とは限らない。
- e) 異なる生活環境の中での滞在としては苦痛が多い。
- f) 教育指導のみの目的での3ヶ月という期間への疑義。研究や診療の活動をあわせた教員としての実りある生活が望まれる。

② 対応策(1)：中国側との実務的な会談内容、但し(f)、(g)項は日本側のみ案

- a) 1ヶ月ずつで3名、又は、1.5ヶ月ずつで2名派遣という方法

これに対して中国側は、先づ現地の状況に慣れるまでに約2週間かかる事と、専門家の送迎が頻繁過ぎる事を挙げ難色を示した。

- b) 大学の教室から直接派遣が出来難い場合には、関連する出張病院の上級医師の派遣も考えられる。但し、三大学の出身者である。
- c) 十分に教育・研究、或は診療に経験のある中～高年の助手の派遣。中国側には潜在的に教授クラスの派遣を望む傾向がある。

上記 b) c) については、中国側は了承の意を示した。

- d) 派遣専門家数を減少し、研修医を多くする(計画の変更)方が効果大。これについては、話題のみで、ここで決める内容ではないと申してある。
- e) 専門家の研究が可能となる環境整備(生活及び研究環境)の促進
- f) 3ヶ月の協力内容を濃縮して行えば1.5～2ヶ月で充分であるとも考えることもできる。
- g) 授業期間にあわせて訪中し直接授業に関与する事を望むならば、教授の1週間の集中講義と教授以外の短期滞在という方法の組み合わせも考えられる。しかし、計画の変更となるし送迎の手間はかかる。

③ 対応策(2)：中国側が瞬間発言した内容

若し、三大学からの派遣が3ヶ月滞在が無理であるならば、友好関係を結んでいる他大学の教員の派遣を受け入れてもよい。この提案は会議の席上で呉国宝教授が発言したが、李厚文学長が横からそれを抑制した。元来、今回のプロジェクトとは別に、中国医科大学が友好関係を結んでいる大学の教員による教育その他の援助は自由であった筈である。今に至って、このような提案が出る理由は、専門家派遣は数の上では順調に運んでいるとしても、もっと長期間滞在すればもっと効果があると信ずるのか、中国側が望む授業の期間中に必ずしも来て頂けないので日本式授業の実際に接しられない為か、冬期に専門家がほとんど来て頂けないので11月～4月の間に空間が出来てしまう事の不安等の理由であろうか。この提案の趣旨は「三大学以外の教員を3ヶ月派遣する事」を意味していると推察されるが、いずれにせよ、調査団としては回答出来ないとし、この話題を打ち切った。

④ 専門家派遣に関するまとめ

現在まで派遣は順調であるが、中国側が3ヶ月を要望している事も確かである。日本側としても、教員が多忙で、3ヶ月は全く無理である事のみを主張は出来ない。従って、何等かの対策を講ずる必要がある。他大学の教員を正規の派遣計画の中に入れるか否かについては国内委員会で論ずる必要がある。但し、個人レベルの学問上の興味を充足させる目的が先行する場合には好ましくないし、カリキュラムの編成上も不統一となる恐れがある。又、中国側が、3ヶ月滞在を要望する理由を分析する必要がある。それは(a)R/Dによる契約である、(b)実質的にもっと重厚な指導を期待する、(c)年間に専門家が滞在しない時期がある事への不安、(d)このプロジェクト全体の進行度又は充実度に影響が出るのではないかとの心配、(e)専門家の訪中が、中国医科大学の当該科目の授業期間に必ずしもあわせられない為に教育効果がうすいと判断している等であろうが、一度現地で潜在的な理由を調査する必要があるだろう。いずれにしても、派遣専門家が少なくとも3ヶ月間充実して指導を行える為には学術上と生活上の環境作りが必要であろう。

3-1-5 研修員受入れ

- ・ 1991年度の研修員候補者(5名)の確認、及び1992年度の研修希望者10名の中から候補者の選出の為に面談を行った。前者については全員受入れ可の判定を、後者については5名の候補者と1名の補欠の選出を行った。次の各項を判定の基準とした。

- ① 日本語の理解度
- ② プロジェクトの意義の理解度
- ③ 研修への意欲の充実度
- ④ 研修時の自己の目的の明確度
- ⑤ 帰国後の大学・教室の受入れ体制
- ⑥ 帰国後の教育・研究における自己の計画
- ⑦ 健康状態

<研修員に関する中国側の対応>

- ① 30才台を中心に候補者を絞った。しかし乍ら、実際には40~50才台の希望者もあった。
- ② 1992年度の希望者10人のうち、9人が女性である事の質問に対しては中国は男女平等である事以上の説明は無かった。
- ③ 5名以外にもう一名の研修生受入れを希望している。JICAの枠を越えるので、他の省に関連した留学生の受入れを打診したい。
- ④ 帰国後なるべく教務部に関与させたい。

<研修員受入れに関する日本側の希望及び対応>

- ① 可能なら若い教員を望む。
- ② 日本語が上手である事は勿論だが、英語も可成りの力をもつ者が望ましい。

- ③ 帰国後少なくとも3～5年は中国医科大学又は中日医学教育センターに在籍し、留学効果の普及に努力してほしい。
- ④ 留学中に教育のみならず研究上の学習もして欲しい。出来れば、論文の作成があると更によい。後の共同研究に繋がる。

3-2 問題と対策

3-1の各項目毎に問題点と対策を記した。本項では要点のみを列挙する。

1) カリキュラムの開発について

- ① 科目の新設・増設を徐々に加えてよい時期となっている。
- ② 同時に既成の科目の教育内容充実が望まれる。
- ③ 診断科学の独立が望まれる。
- ④ 教育する側の日本語使用の頻度と意欲の促進
- ⑤ プロジェクト開始後カリキュラム開発についての中国側の反応と受入れ状況
- ⑥ カリキュラムの再検討（全般）、出来れば国内委員会でカリキュラム作成

2) 教材開発について

- ① 教科書・マニュアルの定義、内容の相互理解。推進と作成のタイムスケジュール厳守
- ② マニュアルの使い方の指導の必要性（教員向け及び学生向け）
- ③ 日本語班用図書の実、図書室の整備とその使い方説明
- ④ 各種の科のビデオ・スライドの完備、特に実習を主体に揃える事
- ⑤ 中国側の意見は既に聴取してある。

3) 教育法開発について

- ① 臨床通論・C. P. C. の開催促進、内容充実（講座間の協力関係導入も含める）
- ② 一般に教科書（マニュアル）の使い方、図書室の使い方の理解を進めた後、自主的に勉強する方向に習慣づける事の必要性。
- ③ 教科科目としてのE. E. P. 及び自主学習の、やがての導入。
- ④ 日本及び諸外国における医学教育・医療全般についての紹介（教員向け）。

4) 専門家派遣について

- ① 3ヶ月の要望の真意の解明と対応策
- ② 中国側から一瞬提案があり李厚文学長がその場で発言を抑えた「三大学以外の教員の派遣」への態度の明確化
- ③ 専門家滞在を容易にする研究上及び生活上の環境の尚一層の整備

5) 研修員受入れについて

- ① 若い年代に絞って候補者を紹介して来た事に対する高い評価
- ② 帰国後の或程度の義務の明文化の必要性（例：JICAに対する誓約書等）

- ③ 研修員に女性が多い事の説明
- ④ 研修員に研究上の意欲の要望
- ⑤ 中国側から、少なくとも1名増員の要望。今年は特に病院運営の研修の希望あり。

3-3 供与資機材の利用状況

昨年度分までの機材及び図書が到着し、大部分は実働を開始している状態であった。到着した機材の書類上の報告を受け、一部について団員全員で視察を行った。

<見学場所>

科研楼	計算機中心	パソコン32台、AST社(台湾)製、安価の理由
東楼	教務処教材科 (日本語学班)	Video & Slide 投影機。複写機4台(各種)、教科書印刷上A3版まで扱える複写機の要請あり。
新楼 1,2楼	中心弁公室 (センター事務室)	ワープロ、パソコン各一台。機能的である。各専門家の室にせめてワープロ又はパソコンを各一台常備する事が望ましい。
	図書室	新しく日本語班の学生の為に設定された小室で机8、椅子20、書棚8あり。落付いた部屋。9時まで開室と聞く。書類の登録の方法を考える事、本の管理を厳重にする事、机と椅子をもう少し増す事を依頼。
新楼5楼	語言實驗室	50ブースあり。ランゲージラボは既に充足していると思われる。更に以前からあるものあり。古いものは英語班等に使用しているとの説明であった。
新楼6楼	投影電視	AV機能・プロジェクターを備える教室、十分な設備である。
新楼1楼	13番教室	日本語班の同位元素課の講義参観 教授が黒板に書く事項のみをノートし、口頭で話された事はノートしていない事が気懸りである。 日本語の講義内容を正確に聞くには、マイクが必要であると思われる。理解も促進されると思われる。
医院新楼	3楼	循環内科監護室で、手術の放映を参観
医院新楼	12楼	手術室見学、顕微鏡及び他のモニターの使用状況を視察

以上、視察の範囲では一般に良好に作動中であった。

<考察>

- ① 計画であったものが実現し、効果の一部が目に見えるものとなり反応は大変良い。
- ② 視察した部位に関する限り、有効に使用されて居り、又、登録等も注意深く行われていた。

図書・機器の登録のラベルは、もう少し詳しい方がよいとの指摘もあった。同時に登録の方式の一元化も望まれる。

- ③ 第1年度分を決定してから、機材が到着するまで約1年かかった。実際に到着し機能し始めたのはごく最近であると聞く。決定してから到着までの期間をなるべく短縮する事が望まれる。
- ④ パソコン・ワープロの必要数の見込設定の必要性。日本におけると同様に1～2年毎に新型が出るとすぐ購入する希望が出ると思われる。あらかじめ5年計画位の中で必要な数を設定しておく必要がある。一教室に一台を希望しているが先づは共同利用から始めるべきである（共同利用は不慣れであるとの国民性もあろうが）。
- ⑤ それに反して、短期専門教室には各一台ずつ少なくともパソコン又はワープロを配置する事が望ましい。この際停電対策も必ず吟味しておく必要がある。
- ⑥ 機器によっては、日本語と英語の両説明書があった方が使い易いとの提言があった。
- ⑦ ランゲージラボは、既に充分設営が出来ていると思われる。
- ⑧ 図書については種類の増加と一種類の本の増冊が必要であろう。
- ⑨ 故障時の対策、修理の手続き等（中国では円滑ではないと聞く）
- ⑩ 代替が必要となる時期の推定と代替の実施の手続き（同上）
- ⑪ 日本語学生の教育用としての供与機材であるが、他グループの使用については何等かの手続き、又はルール作りが必要である。50人分の資料で400人の学生の面倒は見切れない。
- ⑫ 教員用スライド作製機の必要性
- ⑬ 基礎的教育用共通機器は一応揃ったが、実習用機器、臨床診断科及び臨床実習用の機器という様に系統的に購入計画を立てる必要があろう。

4. 指導内容

4-1 日本側のとるべき対応策

既に報告書の文中に数ヶ所で触れ、また3-2問題と対策の項にも記したが、もう少し抽出すると次の如くである。

- a. カリキュラム全般の再検討、必要ならカリキュラム委員会設置
- b. 教員に対し、日本及び諸外国の医学教育・医療全般の紹介。毎年1回位が望ましい。
- c. 教育する側の日本語使用意欲の促進
- d. 講義マニュアルの作製推進と使用法の解説
- e. 臨床通論・C. P. C.、G. R. の実施の促進、やや時間をおいてから自主学习、E. E. P. の導入
- f. 臨床診断科の分離独立の推進
- g. 図書・教材用ビデオ・スライド・実習機器の供与促進
- h. 専門家派遣期間3ヶ月に対する策の検討
- i. 研修員受入れ1名増員の件
- j. 供与機材決定から現地到着までの期間の短縮

4-2 現地のとるべき対応策（含む技術指導）

a. 中国側の反応及び希望調査

- ① カリキュラム開発 : 従来とどれ位変化したか、新しいものが加わったか、充実したか、未だ成果を感じていないか、今後何を要望するか等。必ずしもアンケートの形でなく聞き込みでも可。(教員と学生と別々に調査)
- ② 教材開発 : 今回一応調査して頂いてあるが、教科書以外のビデオ・スライドの要望を聞いて頂く。(教員向)
- ③ 教育法開発 : 既に紹介又は導入されている方法以外に、どの様な方法を望み又、実施に移せるか。(教員向) 臨床通論・C. P. C. などの様にして世話するか。
- ④ 専門家派遣3ヶ月を望む理由の解明 : 関係する3大学以外の教員の派遣をJICAのプロジェクト内で行うという案が真にあるのか。今日までの理解でも友好関係の大学からの教員の訪問は自由である筈である。
- ⑤ 帰国研修員の報告は既に聞いて頂いてあるが、中国医科大学に帰ってからのフォローアップ

b. 機材の供与・設備の充実・技術指導その他

- ① 実習機器のリストアップと購入促進。既に進んでいると思われるが尚一層

- ② 図書の増冊と図書室の整備の促進（ビデオ・スライドも含める）
- ③ 100名の教室にマイクの設置。大きく聞えた方が日本語の理解は容易である
- ④ 教員用として影写用スライド自動作製機の購入
- ⑤ パソコンの必要数と限界の見極め
- ⑥ 専門家の室にワープロ又はパソコンの常備
- ⑦ 専門家の生活環境の思い切った改善策
- ⑧ 技術指導は瀋陽を中心に行う事の提案とその為の補助の模索
- ⑨ 修理・代替の購入等は中国では困難と聞くが、その対応策の検討
- ⑩ そろそろ臨床診断科や臨床実習用機器のリストアップ
- ⑪ JICA 供与機材の使用に関する日本語班以外との調整
- ⑫ 供与した機材の使用現況調査と使用促進。特にビデオ・スライド
- ⑬ 供与した機材・図書・ビデオ・スライド等の、登録方法とラベル貼布の促進
- ⑭ ワープロ・パソコンの使用の為の停電対策。特に専門家の室について
- ⑮ 中国医科大学以外の大学との関係強化の方法を中国側と打合せる。特に東北地区以外も含めて。これは中日医学教育中心プロジェクトの普及効果の拡大を目的とする。

5. 合同委員会の協議結果

5-1 経緯と概要

本調査団派遣に先立ち、合同委員会の協議結果として会議議事録に盛り込むべき内容等について、調査団員による派遣前団内打合せ等を通じ十分検討し、調査団対処方針案を策定した。

(附属資料①参照)

本合同委員会は、平成3年10月8日午後2時より中国医科大学内会議室において友好裡に行われ、午後5時30分、我が方安田健次郎巡回指導調査団団長、先方李厚文中国医科大学学長との間でほぼ我が方案のとおりで議事録に署名を了した。

(附属資料②参照)

6. その他の事項

6-1 臨床指導

臨床系の専門家が訪中の期間には当然行われるであろうが、今日まで聞いたところでは外科系の手術は大なり小なり共同又は日本の専門家が単独で行う事は無理であると理解される。ライセンス上は可能であると聞く。当然内科系が中心となる。

6-2 共同研究

充分なる事前打合わせが必要である。研究環境が異なるので直ちに実施は困難であるが、派遣専門家の滞在を充実したものにするには、臨床指導と同様に促進する必要がある。

6-3 技術普及

中日医学教育中心の趣旨から、周辺の医科大学から始めて全国に向けての医学教育の普及活動が望まれる。専門家による出張講義、瀋陽に呼んでのセミナーの開催又は東北地区の巡回セミナーというやり方もあるであろうが、瀋陽に呼んでのセミナー開催を最初に数回重ね、順次東北地方及び東北地方以外の地方への巡回セミナーの波及が良いのではないか。この場合には中国医科大学出身者が主要ポストを占める大学を選ぶのも一案である。

6-4 中日医学教育中心附属病院（仮称）関係

現在までの理解では、この病院の建設とJICAとは直接の関係は無い筈である。即ち、中国医科大学が遼寧省及び衛生部の援助を得て独自に建設中の病院であり、完成の暁には中日医学教育中心附属病院として使いたいとの意志を中国医科大学が持っている、と解釈するのが冷静な現状認識であろう。従って、JICAの調査団の報告内容では無いが仄聞した事を参考までに記載すると次の如くである。内容については長期派遣専門家が十分な情報を持って居られるであろう。

- ① 現在、外来部門・検査部門の為の三棟の建物は、骨組み・外装は終り1992年3月には完成する。
- ② その後、後方に400~600床の病院建設の計画を持っている。
- ③ 病院の設計については既に計画を持っているであろうが、日本からの設計専門家の意見を求めている。少くとも日本の病院の設計の例を知りたい意向がある。
- ④ 内部設備に関しては今回の調査団の知る範囲ではない。
- ⑤ 病院管理者・運営者・事務職員等の訓練を、第一病院を含めて、日本側に依頼したい意向があり既に具体的な提案がある。
- ⑥ 周辺のアパートは既に購入済みと聞く。

⑦ 最近、病院予定地の外周に更に土地を購入したとの事である。

以上は本来の中日医学教育センタープロジェクトとは無関係な現地における実情であるが、全く無関心である訳にもいかないであろう。少なくとも機能面である③項と⑤項は配慮の対象となり得るかも知れない。

最後に、約2年前の事前調査の時の状況と較べると現地の全ての面で格段の変化が感じられる。単に機材の供与という様な目に見える変化のみならず事務処理等の機能面でも日本側の意図が浸透し、ひいては中国側に多大な効果を与えている事を痛感した。国民性・習慣・医学に対する理解度の差、設備等の不便の中で、このプロジェクトを開始し軌道にのせるまでの長期派遣専門家の努力は並々ならぬものがあったであろうと思われる。この事は現地の李厚文学長及び呉国宝教授が口を揃えて称賛するところである。又、短期派遣専門家の熱心な指導は具体的に教育の中に反映されて居り、中国側が陽に陰に謝意を表明している。今後共、小難を排除・解決しながら本プロジェクトが本来の目的に向かって進展する事を切に願うものである。

附 属 資 料

- ① 巡回指導調査団対処方針（案）
- ② 会議議事録（日本文及び中国語文）
- ③ 中国側提出の技術協力実施概況報告
- ④ 教材開発に係るアンケート結果
- ⑤ 機材台帳（供与機材及び専門家携行機材）
- ⑥ 供与図書目録

中日医学教育センタープロジェクト
巡回指導調査団対処方針(案)

調査団確認事項及び協議事項	現地における活動及び対応	調査団派遣時の対処方針
<p>I. プロジェクト協力計画内容について</p> <p>1. カリキュラム開発 衛生部の教育大綱及び国家科学技術委員会の指導指針に沿って、現行のカリキュラムの大幅な改定は行わず、当面は普通基礎(自然科学一般)と基礎医学教育の充実、及び麻酔科学の独立についてのみ改善を行うこととしている。</p> <p>2. 教材開発 中国の疾病事情に則した適当な日本語の教科書がないため、中国の教育カリキュラムに適合し、かつ新しい知識も兼ね備えた日本語の教科書を開発することとしている。</p> <p>3. 教授法開発 学生の問題解決能力や自主的学習能力の向上を図るため効果的な教授法を導入し、併せて教授陣の人材養成を行う。</p>	<p>派遣専門家は各専門分野のカリキュラムについて現状を調査し、国内委員会で報告を行ってきている。昨年の計画打合せ調査におきたこともあり、大規模な改定は行わないこととしない。</p> <p>核医学及び循環器内科については先に派遣された短期専門家と中国側教官との共同作業でマニュアル第1版が作成された。</p> <p>専門家派遣が行われていない科目については、日中間の連絡により作業を進めることとなるが、作業手順や到達目標などに検討すべき点も残されている。</p>	<p>1) 派遣中専門家が現状を聴取する。 2) 1)をふまえ中国側と協議を行う。 3) 必要に応じて中国側各科に現在までの充足度についてレポート提出を求めめる。 4) 1)、2)、3)の結果により現在の方針に基づき引き続き活動を行うかにつき検討を行う。修正、変更が必要な場合は提言を与えることとする。 5) 以上結果を議事録に取り纏める。</p> <p>1) 現時点における望ましい教材開発の手順や到達目標、及び伴う諸問題の対処法について国内で日本側案をまとめておく。 2) 派遣中専門家が作業の進捗状況について聴取する。 3) 必要に応じて中国側各科に現在までの充足度についてレポート提出を求めめる。 4) 1)、2)、3)をふまえ中国側との協議に臨み、望ましい今後の教材開発方針について検討を行う。 5) 以上結果を議事録に取り纏める。</p>
	<p>本年6月上旬に現地セセミナナが開催され、派遣中専門家や多くの中国側参加者により日本医学教育の現状や問題点及び日本医学教育の教授手法について討議が行われるなど積極的な活動が行われている。また供与機材の送付、引取りも進み、聴覚機器の整備も行われつつある。</p>	<p>1) 派遣中専門家が現状を聴取する。 2) センター内視察を行い、新しい教授法導入に必要な機材の設置状態を確認する(従来から大学にある機器、及び供与済機材の活用状態を確認する)。 3) 必要に応じて中国側各科に現在までの充足度についてレポート提出を求めめる。 4) 1)、2)、3)をふまえ中国側との協議に臨み、今後の望ましい教授法につき意見交換を行う。 5) 以上結果を議事録に取り纏める。</p>

調査団確認事項及び協議事項	現地における活動及び対応	調査団派遣時の対処方針
<p>4. 臨床指導及び共同研究 先記のカリキュラム、教材、教授法の開発に加え、余裕があれば専門家の業務内容に組み入れられることとしている。</p> <p>5. 技術普及 プロジェクトの将来的な展開として、本プロジェクトに移転されたた技術が中国東北部の関連大学をはじめ、広く普及されることが望ましいと考えられている。</p>	<p>派遣された短期専門家により必要に応じ、単発的指導及び助言を行なってきている。</p> <p>派遣専門家による特別講演や現地セミナーの開催などにより、多くの参加者に評価を受けてきている。</p>	<p>1) 必要に応じ、今後の方針について中国側と協議を行なう。 2) 必要に応じ、結果を議事録に取纏める。</p> <p>1) 必要に応じ、今後の方針について中国側と協議を行なう。 2) 必要に応じ、結果を議事録に取纏める。</p>

調査団確認事項及び協議事項	現地におおける活動及び対応	調査団派遣時の対処方針
<p>II. 技術協力計画について</p> <p>1. 専門家派遣 中国側の要望になるべく応える形で、外科、内科、基礎医学それぞれ年間3名、2か月程度の派遣を行ってきている。</p> <p>2. 研修員受入れ 過去2年間、毎年5名ずつ受け入れを行ってきている。</p> <p>3. 機材供与 過去2年間、各種事務機器、視聴覚機器、医療機器、及び書籍類の購送を行ってきている。</p>	<p>中国側からは専門家の派遣時期にその分野の授業が行われることや、なまれば長期の滞在が行なわれることが要望に含まれている。しかしながら日本側専門家は2か月程度の派遣が限界であり、業務を短期間に凝縮して行っている。</p> <p>平成元年度研修員5名は本年3月に帰国し、中国医科大学にて活動を再開している。</p> <p>2年度研修員5名は現在各大学で来日研修中である。</p> <p>3年度研修員については5名に絞られ、要請書も送付されたが、人選に変更の可能性があるとの情報もある。4年度以降についても候補者が選ばれたら、今後の研修員の人選にあたっては年齢層をどこに絞るかなど検討の余地がある。</p> <p>各種機材は中国に到着し、引き取り手続きも順調に進行している。</p>	<p>1) 来年度(4年度)の派遣について日本側の案を取り纏め、派遣可能な科目、教官名、期間について整理しておく。</p> <p>2) 現地において派遣専門家の業務内容について再確認を行う。</p> <p>3) 1), 2) をふまえ中国側との協議に臨み来年度の専門家派遣計画を議事録に取り纏める。</p> <p>1) 帰国研修員の活動状況を確認する。</p> <p>2) 3年度研修員5名の最終確認を行い、来日研修に備えての心構えなどについて助言を与える。</p> <p>3) 4年度以降の研修員候補者に対し面接を行う。</p> <p>4) 1), 2), 3) をふまえ中国側との協議に臨み、必要に応じ提言を与える。</p> <p>5) 以上結果を議事録に取り纏める。</p> <p>1) センター内を視察し、到着済の機材の設置及び稼働状態について確認を行う。</p> <p>2) 1) の結果をふまえ必要に応じ責任者の指名や運用方法の学習などについて提言を与える。</p> <p>3) 平成3年度の機材の内容及び送付時期の見直しについて報告、説明を行う。</p> <p>4) 4年度以降の機材供与の内容、方針について中国側と協議を行う。また機材の使用を促進するための条件について検討を行う。</p> <p>5) 以上結果を議事録に取り纏める。</p>

調査団確認事項及び協議事項	現地における活動及び対応	調査団派遣時の対処方針
<p>Ⅲ. その他</p> <p>1. 本プロジェクトにおいては日本医学教育に携わる教授陣の高齢化に伴い、中堅層の人材育成を協力的の一つとしてしている。</p> <p>2. 専門家(特に短期)の住環境整備について課題があり、今まで数々の改善要求を行ってきている。</p>		<p>1) 今までの協力が中国側、特に中堅層の水準向上にいかにかに寄与しているかを確認する。</p> <p>2) 中国側、特に中堅層の教育に対する熱意を確認する。</p> <p>3) 中堅教員が活動を行いやすい方向を策定すべく日本における教員の教育現況や心構えなどについて紹介を行う。</p> <p>1) 専門家の住居の視察を行なう。</p> <p>2) 必要に応じ、中国側と意見交換を行なう。</p>

中日医学教育センタープロジェクト巡回指導
調査団と中国側関係者との会議議事録（要旨）

国際協力事業団（以下「JICA」という。）が組織し、慶応義塾大学医学部安田健次郎教授を団長とする日本側巡回指導調査団（以下「調査団」という。）は中華人民共和国における中日医学教育センター・プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）について、プロジェクト開始からこれまでの業務実績・現況・進行状態を把握し、中間的評価を行なうとともに今後の技術協力計画の詳細を策定するため、1991年10月4日より1991年10月12日までの日程で中華人民共和国を訪問した。

中華人民共和国滞在期間中、調査団は本プロジェクトの有効な実施のため、業務の進捗状況および具体的協力内容に関してプロジェクト合同委員会 李厚文 委員長をはじめとする中国側関係者と意見を交換し、一連の討議を行った。

以下、その会議の結果を別紙のとおりに取り纏め、調査団と中国側関係者との間で確認するものである。

瀋 陽 市
1991年10月 8日

安田健次郎

安田 健次郎
巡回指導調査団 団長
国際協力事業団
日本国

李厚文

李 厚文
中日医学教育センター・プロジェクト
合同委員会 委員長
衛生部
中華人民共和国

1. 協力計画の実績および評価について

プロジェクト開始以来、この2年間に亘る協力内容は、当初目的である教育の改善に向けて、現行のカリキュラム・教材・教授法の開発をどのように具体的に進めるかにつき、日中双方の間で協議・決定し、その方針に沿って各分野の業務を展開してきたところである。それぞれの分野ともおおむね当初計画通りに推移していると考えられる。なお、共同研究分野では早急に研究テーマの設定や協力の範囲など日中双方が研究開始に必要な条件を整え、着手する必要がある。

(1) カリキュラム開発

先に、日本側より提言のあった自然科学一般を含む基礎医学の充実、麻酔学の独立、脳外科学の教育時間数の増加のうち、基礎医学分野を除いて麻酔学教室の新設や時間数の拡充・強化などが図られた。また、具体的改善点は次のとおり。

①外科学分野より麻酔学課程を独立させ、必須科目とした。

②麻酔学の授業時間数を4時間から20時間へと強化した。

③脳外科学の授業時間数を10時間から18時間へと強化した。

なお、本分野については、引き続き必要に応じて部分的な修正は行なうものとするが一方、現在進行中の教授法開発および教材開発の状況を十分見極めたうえで、医学教育全体のカリキュラムを総合的に調整すべき旨、日中双方は確認した。

また、日本側より診断科学の組織強化および充実を提言した。

(2) 教材開発

日中双方はこれまでに教材開発に当たる双方の責任者を決定し、衛生部の教育大綱および国家教育委員会の指針を踏まえ、基礎・臨床のべ40科目の教材を開発することとした。その具体的開発方法については各科目の教科内容および教科書の作成準備状況が異なることから双方の責任者によって開発の手順および教材の内容・密度が決定されることとした。

更に、これら教材の第1原稿を可能な限り1992年3月までに編纂し、各科目の授業で施行した後、その結果を勘案し、必要に応じて随時補足・改定を行ないつつ、1992年末までに完成させることを目途とする。

(3) 教授法開発

教授法については効率的な授業を行なう観点から、視聴覚機器を活用しつつ、従来の単科的教授法とは異なる複合的授業が行なえるよう『專題総合講座（臨床通論）

』、『C. P. C. 』および『G. R. 』を短期専門家とカウンターパートの両者が協力し、共同講義を行なうこととした。これまでに『專題総合講座（臨床通論）』を4回および『C. P. C. 』1回を行なった。これらの教授法は教官を始め学生からも好評を得ており且つ徐々に定着しつつある現状に鑑み、今後は更にこの分野を強化すべきとの考えで意見の一致をみた。

さらに、日本側より自主的学習態度の養成を目的とした『自主学习』および医師としての自覚の涵養を目的としたE. E. P. の導入が提言された。

(4) 臨床指導および共同研究

本分野ではこれまでに来華した短期専門家より必要に応じて単発的指導および助言を行なってきたが双方の事前準備が不足し、所期の目的を十分に行ない得なかったと思われることから、今後は指導・研究項目および実施手順を予め設定し、実施することとする。

(5) 技術普及

日本語医学教育にかかる教育改善には関連大学をはじめ行政当局も極めて高い関心を示している。これまで関連機関において短期専門家による『特別講演』や教授法に関するセミナーを開催し、参加者の高い関心を受けるとともに本プロジェクトに対し、大きな期待がよせられており、プロジェクト本来の業務において支障にならない程度でプロジェクトの成果を関連機関へ普及させることとする。

2. 1992年度プロジェクト実施計画について

(1) 専門家派遣

プロジェクト開始以来、長期専門家2名、短期専門家14名が派遣され、各専門家は中国医科大学における講義、教材開発などの業務に加え、関連医療機関とも技術交流を行い好評を得た。中国側はかかる専門家の活動に謝意を表するとともにあらためて3カ月間の派遣について要望した。派遣科目は次のとおり。

中国側は各専門家の派遣に先立ち、各専門家の略歴および專題講義のテーマを通知するよう要望した。

① 派遣分野：内分泌内科・眼科・免疫学・脳外科

派遣期間：1992年3月から1992年5月まで

② 派遣分野：泌尿器外科・細胞生物学・生理学・血液内科

派遣期間：1992年 5月から1992年 7月まで

③ 派遣分野：微生物学・胸部外科・組織発生学・病理学

派遣期間：1992年 9月から1992年11月まで

なお、日本側は教材開発の迅速かつ円滑な進展のため、派遣可能な範囲で上記以外の短期専門家を派遣し、教材の早期完成を目指す旨提案し、中国側の了解を得た。

(2) 研修員受入れ

日中双方の関係者は1991年度の研修員候補者と面談し、専門知識・語学能力を総合的に判断したうえで次の者を1カ年間受入れることとした。併せて、1992年度の研修員候補者とも面談した。

氏名	(英文氏名)	性別	年齢	所属先および職位	受入先
①劉 啓	Dr. Liu Qi	男	35	第三付属病院消化器外科 講師	九州大学
②馮 戈	Dr. Feng Ge	女	34	第三付属病院産婦人科 講師	慶応大学
③肖衛国	Dr. Xiao Wei-Guo	男	35	第一付属病院血液内科 講師	東北大学
④解 強	Dr. Jie Qiang	男	29	第一付属病院心臓外科 講師	慶応大学
⑤路振富	Dr. Lu Chen-Fu	男	37	中日医学教育センター 副処長	慶応大学

(3) 供与機材

日中双方は先の『計画打合せ調査団』の基本方針および業務の展開状況を踏まえ、1992年度の供与機材は医学参考図書、印刷設備、血液ガス分析装置、超遠心分離器、車両等が適当である旨、意見の一致をみた。

なお、中国側は学生が自主的に学習ができるような施設の設置とその強化・拡充に努める旨、表明した。

(4) その他

日本側はこれまで中国側が行ってきた住宅環境整備に関し、多くの点で改善されつつあることを評価しつつ、中国側の更なる改善を要望した。

中国有关当局与中日医学教育中心
项目巡回指导调查团的会谈纪要

日本国际协力事业团(以下简称JICA)组成的以庆应义塾大学医学部安田健次郎教授为团长的日方巡回指导调查团(以下简称调查团),为了解中华人民共和国中日医学教育中心项目(以下简称该项目)成立以来的工作成绩与进展情况在进行中间评价的同时,并制定今后技术合作的详细计划,于1991年10月4日至1991年10月12日访问了中华人民共和国。

在中华人民共和国访问期间,调查团为该项目的有效实施与以中日医学教育中心协调委员会李厚文委员长为首的中方有关当局就项目工作的进展情况及具体合作内容交换了意见并进行了一系列的会谈。

会谈结果汇编于本纪要的附件内,并得到了会谈双方的确认。

一九九一年十月八日

于沈阳市



中华人民共和国卫生部
中日医学教育中心协调委员会

委员长: 李厚文



日本国际协力事业团
项目巡回指导调查团

团长: 安田健次郎

附 件

1、关于合作计划的成果与评价

该项目实施以来，两年间的合作始终面向教学改革这一根本目的，中日双方讨论确定了如何具体进行现行的教学计划、教材和教学方法的开发，并正在接着这一方针来开展各领域的工作。各领域的工作基本上是按着原计划进行的。但在共同研究领域内于中日双方开始共同研究之前，应尽早着手准备开始研究的必要条件，如确定研究课题、合作范围等。

1) 教学计划开发

首先，在日方建议的加强包括普通自然科学在内的基础医学教育，麻醉学科的独立，增加神经外科学的教学时数等有关问题中，除基础医学领域外，对开设麻醉科教研室，增加学时数等问题已列入计划，具体的改革做法如下：

- ①把麻醉学科从外科学中独立出来，作为必修学科。
- ②麻醉学的教学时数由4学时增加到20学时。
- ③神经外科学的教学时数由10学时增加到18学时。

中日双方一致认为，根据需要对该领域还要继续进行部分调整，另外在充分了解教法开发和教材开发现状的基础上，对医学教育整个计划还要进行统一调整。此外，日方还建议加强诊断学的组织机构。

2) 教材开发

中日双方此前已指定了教材开发的双方负责人，并决定接着卫生部的教学大纲和国家教委的教育方针，对基础、临床40个学科进行教材开发。关于具体的开发方法由于各学科的教学内容及教科书的编写准备情况不同，可由双方负责人来决定实施开展的步骤及教材的内容与深度。

教材开发的第一稿限于1992年3月前编完，各科在应用该教材授课之后，考虑其结果并视需要继续随时补充、修订，争取于1992年末完成。

3) 教授法开发

关于教授法,从提高授课效果的观点出发,一方面应用视听教学设备,一方面改变原来的单科讲授方法为多科综合授课即“临床专题综合讲座(临床通论)”、“临床病例讨论会(C.P.C)”及“G.R.”,短期专家与中方对等人员合作,共同进行讲授。迄今为止,已进行4次“临床专题综合讲座”和1次“临床病例讨论会”。鉴于上述教授法已获得教师和学生的好评,且目前正逐步得以落实,双方一致认为,今后应对该领域进一步加强。此外,日方建议引入以培养自学能力为目的的自主学习和以培养医德为目的的“E.E.P”。

4) 临床指导及共同研究

本领域到目前为止,仅限于来华的短期专家根据需要偶尔进行一次指导与建议。双方事前准备不足,所期望的目的不能充分完成。今后应预先制定好临床指导与共同研究的课题及具体实施步骤,以便实施。

5) 技术普及

对于用日语进行医学教育的教学改革,中国的有关大学和行政当局都十分关心和重视,迄今为止,通过短期专家的“特别讲演”和“教学方法研讨会”的召开,有关单位的参加人员对本项目抱以极大的关心与期待,在本项目工作不受影响的条件下,应把本项目的成果向各有关单位进行普及。

2、1992年度项目实施计划

1) 派遣专家

项目开始以来,共计派遣了长期专家2名,短期专家14名。专家除在中国医科大学内进行讲学、教材开发等工作外,还和其它有关医疗机构进行了技术交流,均获好评。中方对专家的辛勤工作深表谢意,并希望派遣时间为3个月。派遣专家的科目如下。

中方希望在派遣短期专家来华前,将专家的简历和专题报告题目通知中方。

①派遣学科：内分泌、眼科、免疫学、神经外科。

派遣期间：1992年3月至1992年5月。

②派遣学科：泌尿外科、细胞生物学、生理学、血液内科

派遣期间：1992年5月至1992年7月。

③派遣学科：微生物学、胸外科、组织胚胎、病理学。

派遣期间：1992年9月至1992年11月。

为使教材开发工作迅速并顺利进展，日方提议在可能的范围内，除上述学科以外还将派遣部分短期专家，以使教材开发工作早日完成，中方对此表示理解。

2) 关于接受进修人员

中日双方有关人员于1991年度的进修候选人进行了面试，根据其专业知识及语言能力进行综合判定，确定了下列人员赴日进修1年。同时，对1992年度的赴日进修候选人员也进行了面试。

姓名	性别	年龄	单位	职务	进修单位
刘启	男	35	附属三院普外	讲师	九州大学
冯戈	女	34	附属三院妇产科	讲师	庆应大学
肖卫国	男	35	附属一院血液内科	讲师	东北大学
解强	男	29	附属一院心脏外科	讲师	庆应大学
路振富	男	37	中日医学教育中心	副处长	庆应大学

3) 关于提供仪器设备

中日双方根据项目计划协商调查团的基本方针及项目工作的开展情况,把1992年度计划提供的仪器设备定为医学参考书、印刷设备、血气分析仪、超速离心机、车辆等是适宜的。双方的意见一致。

另外,为了今后更好地培养学生的自学能力,中方提出应努力强化和扩充自学用的视听设备。

4) 其他

到目前为止,中方在改善日本专家居住条件方面已做出了许多努力。对此,日方给予肯定并希望中方继续进一步改善。

中日医学教育センタープロジェクト技術協力実施概況 及び1992年度の年次計画（案）

1989年10月18日、中日医学教育センタープロジェクト技術協力の協議調印以来、合同委員会委員長李厚文教授と専門家首席顧問長野政雄教授、調整員立場正夫先生の指導の下でプロジェクト協力計画は順調に実施している。本文は主に計画の実施概況、改善すべき問題及び92年度の年次計画（案）について調査団に報告する。

I カリキュラムの開発

1. 日本語医学クラス現行のカリキュラムの中に存在する主な問題

1990年6月JICAから石村、藤井、石出三名の短期専門家を派遣し、日本医学クラスの基礎と臨床の教育について実情調査を行い、次の意見を提出された。1) 普通基礎（自然科学一般）と基礎医学教育の充実

2) 麻酔科学の独立

3) 脳外科の教育時間数の増加

2. 現行カリキュラムの改善

1990年10月12日JICAが医療協力部長曾我紘一を団長とする調査団を組織し中国を訪問した。中国側関係当局と会議議事録を調印した。議事録の中に、短期専門家の調査意見により、現行のカリキュラムの改定することを決めた。それで我々は議事録の決定について充分討論し、次のように現行のカリキュラムを一応調整した。このカリキュラムは1991年7月から実施する予定です。（別紙参照）

1) 麻酔学の改善点

- ① 麻酔学教室を成立して麻酔学の教学大綱を編集し、教官を選んで講義の準備を行っている。
- ② 教育カリキュラムの中に麻酔学の課程を増やした。
- ③ 麻酔学コースを学生の必修科目としている。
- ④ 麻酔学の授業時間数は20時限に決った（もともと外科学の中で麻酔学科の授業時間数は4しかなかった。）

2) 脳外科の改善点

- ① 脳外科の授業時間数を元の10時間（講義6時間、実習4時間）から18時間（講義10時間、実習8時間）に増やしました。

3) 基礎教育と基礎医学教育の充実

① 教師レベルを高める

特に基礎教育を担当している教師の日本語レベルを上達させるため、日本に留学させる機会を作るのに努力している。

② 実験室条件の改善

今まで、JICAからコンピューター、LL教室の設備、顕微鏡など

の機材を提供された。これらの機材は学生の能力を高めるのにとても役に立つ。今、物理、化学、医学工学、生物などに関する実験の条件を改善するところです。

II 教材の開発

1. 現在使っている教科書に存在した問題

実情調査によると、現在、日本語医学クラスに使っている教科書は主に次の問題がある。

- 1) 内容はわりと古いこと。
- 2) ある教室には日本語の医学教科書を持っていない。
- 3) 参考書は日本のものをそのまま使っているから、中国の疾病事情に合わないことがある。従って、90年度の議事録の中に日本語医学クラスに適する教科書を編集することになった。

2. 日本語医学教科書の編集計画及び開発手順

- 1) 教材開発のために中国側は衛生部の教育大綱、国家教育委員会の指導指針および現在使用中の教科書、卒業試験問題等の資料を日本側に提出する。
- 2) 提出された資料を参考として日本語の医学教科書案を作成するものとする。最終原稿は日本側において作成し、中国側に提出することとする。この作業は中日双方が対等に行うこととする。
- 3) 中日双方は各分野の担当者を早速に決定する。

3. 教材開発の現状

今まで、各教室において教材の編集状況は大分違っている。大体、次のように分けている。

- 1) 日本側によりマニュアルの第一稿を作成された。
- 2) 日本側はマニュアルの第一稿を作成中。
- 3) 中国側からマニュアルの原稿を提出され、日本側に訂正してもらう。
- 4) 中国側は教科書を編集中。
- 5) 中国側は中国語の教科書を日本語に翻訳し、日本側に訂正してもらう中。
- 6) 中日両側は連絡中。

詳しくは表：教材の開発中間纏めをご参照ください。

4. 今後の課題

- 1) 中日両国の実情、教育モデルが異なっている点があるから、両側の専門家は教材に対する概念も違う。この点について理解できる。時間の制限で教科書を編集するのは困難と思われる。ですから、近いうちに早速割合内容の詳しいマニュアルをでき上がるように希望している。
- 2) 日本側がもう編集し始めた科目について、出来るだけ予定通り完成させ、中国側に送って、第二稿の編集に入る。
- 3) 日本側において到着に難しい場合、中国側の関係科目の担当者は出来れば、先に第一稿を編集し、それから、日本側の専門家に見てもらったらどうだろうか。
- 4) 40科目の中で、重点を主要な科目におくこと。
- 5) やり方は別として、マニュアルの第一稿は92年度の6月まで、第二稿は92年の末までに完成すべきだと思う。
- 6) 教科書を印刷するために、早速ワープロ、電子計算器、印刷機などの機材を購入する。

III 教授法の開発

1. 臨床通論とC.P.C

教授法については1990年から1991年までの一年間にわたって日本人専門家は中国側の教師と共に、合計4回の臨床通論及び1回のC.P.Cを行った。その具体的内容は次の通りです。

1) 臨床通論の実施と評価

① 臨床通論の実施：次の表に参照

番号	時間	テーマ	モデレーター	教官	対象	他の参加者
1	90・11・9	急性腎不全	長野 政雄	上田 豊史 木村 時久	日本語医学クラスの学生(71期と73期)約50名	日本語医学クラスの講義を担当している教官並びに学校の指導者約40名
2	90・12・14	呼吸管理	長野 政雄	李和泉 藤宝潤 魏春果	日本語医学クラスの学生(71期)40人	関連課目の医者と研修医約20人
3	91・6・6	肝細胞癌の診断と治療	大槻 昌夫	何芳顕 趙 莉 李宗鉉	日本語医学クラスの学生(71期)46人	当大学の教師、全国各医学院の代表者約200人
4	91・6・7	神経外科疾患の放射線診断とIVR	蓮尾 金博	何芳顕 劉永吉	日本語医学クラスの学生(71期)46人	当大学の教師、全国各医学院の代表者約200人

② 臨床通論の評価（別紙にあるアンケートに参照）

学生の意見：

- ㉑ この方法は新しく、学生に適合している。
- ㉒ もし前もってプリントを配って下さったらもっと理解しやすい。
- ㉓ 臨床実習の間に、こんな講座を行った方が一番いい。

- ㉑ テーマについて講座を行う前に学生に教えた方がいい。
- ㉒ 講座の内容は臨床に密接な関係のあるもの方がいい。
- ㉓ この講座はいくつかのグループに分けて行ってほしい。

当大学先生の意見：

- ㉔ この方法はとても勉強になります。
- ㉕ 自主学習の能力が低い学生にとって理解し難い。
- ㉖ 内容が豊富なため、臨床実習中の学生に適合している。
- ㉗ この方法は学術会議と似ているので、若い医師にとってとても役に立つ。
- ㉘ この方法を通じて学生に将来の研究技法や手順なども紹介してもらいたい。

他の大学からの代表の意見：

- ㉙ このような教授手法は実習中の学生にとっては理解出来るが、低学年の学生にとってちょっと無理と思う。
- ㉚ もっと学生と討論する場を設けばより効果的です。
- ㉛ 前もって学生にプリントを配って予習させたら、もっといい効果が上げられる。

2) C. P. Cの実施と評価

① C. P. Cの実施：次の表に参照

時 間	テ ー マ	モデレータ	教 官	対 象 (人数)
91・6・21	反復して呼吸困難を訴えた51才男性の病例	李宗鉉	渡辺陽之輔 礒山 正玄 何 芳 顕 李 庭 富 林 潔	日本語医学クラスの学生 (73期) 46人

② C. P. Cの評価

日本医学研究所と中日医学教育センターの関係担当者はCPCについて、学生と意見を交換し、次の結論になった。

- ㉜ 臨床通論というのは学生にとって、とても新鮮な形で我が大学にまで取り入れてほしい。
- ㉝ 今後月に一回行われれば、学生にとって勉強になる。
- ㉞ 時間について臨床課程が終った新学期のはじめごろ行うほうがいい。
- ㉟ 形式はグループを作って、前もって学生にその内容を知らせ、予習の時間を与えたほうがいいと思う。

2. 日本語による医学教育の教授手法についての現地セミナー

新しく、進歩的な教授方法を導入し、そしてそれを普及させるために、1991年6月4日から8日まで現地セミナーを行い、予想以上の効果を取めた。(詳しく

は別紙の実施報告書をご参考ください。)

3. 92年度教育方法の開発についての計画及び構想

1) 高学年の学生を対象として続いて臨床通論とC. P. Cを実施する。臨床通論はとりあえず次のテーマを設定したい。

- ① 不整脈
- ② 頭痛
- ③ 血尿
- ④ 悪性腫瘍の放射線診断
- ⑤ 急性腹痛

2) 教育改革についてのセミナーを行う。

- ① 日本語医学クラスの教育改革について論文を発表する。
- ② C P Cの現場見学
- ③ 視聴覚教育の現場見学

3) 日本語医学クラスの学生の自主学習能力を高める。

- ① 視聴覚教育の推進。
- ② スライドの現像設備(カラー)を設置
- ③ 視聴閲覧室を設置
- ④ ビデオ・テープの購入

大1/2 500本

3/4 200本

- ⑤ 日本語版の医学教育用ビデオ・テープの購入
- ⑥ 医学参考書の強化と拡充

IV 短期専門家の派遣

1. 派遣概況

1990年6月から1991年の10月までJICAにより合計14名の短期専門家が派遣された。短期専門家は中国医科大学において講義、講座、マニュアル編集、医療指導などの仕事をされた以外、また中日友好病院、ハルビン医科大学、ベチユイン医科大学、大連医学院、遼寧省腫瘍病院、鞍山市鞍鋼鉄東病院などの教育と医療機関にも技術交流を行い、好評になった。

1) 専門家の名簿

年度	番号	氏名	性別	生年月日	勤務先 大学・教室	職務	滞在時間
90	1	石村 巽	男	1935・8・16	慶應大・医化学	教授	6・19～8・11
	2	藤井 清孝	男	1946・12・16	九大・脳研外科	助教授	5・31～7・30
	3	石出 信正	男	1946・3・3	東北大・一内	講師	〃
	4	稲山 誠一	男	1925・8・20	慶應大・化学	教授	9・17～11・10
	5	上田 豊史	男	1941・10・9	九大・泌尿器外科	助教授	9・27～11・28
	6	木村 時久	男	1940・6・1	東大・二内	講師	〃
91	7	渡辺陽之輔	男	1924・12・5	慶應大・病理学	教授	5・7～7・12
	8	蓮尾 金博	男	1950・1・11	九大・放射線	講師	4・16～6・15
	9	大槻 昌夫	男	1941・9・2	東北大・三内	講師	〃
	10	一矢 有一	男	1948・12・16	九大・放射線	講師	6・1～7・31
	11	磯山 正玄	男	1945・7・16	東北大・一内	講師	〃
	12	山本 慧	男	1946・1・18	慶應大・薬理学	助教授	9・2～10・9
	13	佐々木 毅	男	1943・6・14	東北大・二内	助教授	9・25～10・25
	14	田中 雅夫	男	1949・10・12	九大・一外	講師	〃

2) 仕事の業績

序号	氏名	滞在期間	事情調査分野	講義		講座		教材開発	医療指導		共同研究
				回数	時間	回数	時間		回数	時間	
1	石村 巽		基礎	4	1 2						
2	藤井 清孝		外科			1 1	2 2	○	1 1	3 3	
3	石出 信正		内科						1 6	6 4	
4	稲山 誠一					4	1 6				
5	上田 豊史					8	2 4	○	1 8	5 4	
6	木村 時久			9	1 4	4	1 2		1 6		
7	渡辺陽之輔	2ヶ月				5	1 2	○	2	3	
8	蓮尾 金博	2ヶ月		1	2	8	3 2				
9	大槻 昌夫	2ヶ月				1 2	3 7		7	2 1	
10	一矢 有一	2ヶ月				8	2 6	○	1 3	4 2	
11	磯山 正玄	2ヶ月				4	1 0	○	1 1	2 2	
12	山本 慧										
13	佐々木 毅										
14	田中 雅夫										

2. 短期専門家派遣において存在する問題

- 1) 派遣された専門家の専攻はある時、計画と一致しないことがある。
- 2) 入国時間は予定通り行かない。
- 3) 滞在時間は三か月になっていない。
- 4) 生活の面で専門家に困らせることがまだある。今解決中です。

3. 92年度短期専門家の要請計画

派遣時間	1992年			1993年	
	3-5月	5-7月	9-11月	11-1月	3-5月
専攻分野	内分泌内科 眼 科 免疫学 神経外科	腎臓外科 細胞生物学 生理学 ② 血液内科③	消化内科① 胸部外科① 組織、発生 病理学	微生物学③ 組織、発生 皮膚科① 呼吸内科	生理学 医化学 整形外科① 小児科 ①

- ④ : ① 授業がなし
 ② 当初計画より提前
 ③ 未実施補足

V 研修員の派遣

1. 派遣の概況

1990年から今まで合計3回15名のメンバーを推薦し、面接試験に合格してから研修員として日本に派遣した。

年度	氏名	性別	生年月日	専攻	勤務先	職務	研修先	派遣時間
89	梁再賦	男	57・1・2	免疫学	微生物教室	講師	慶應大	89年3月6日、日本に赴き90年3月26日帰国
	李厚沢	男	33・4・6	脳血管病	一院脳外科	助教授	九大	
	任玉鵬	男	45・4・15	泌尿腫瘍	一院泌尿外	講師	九大	
	冷重光	男	51・7・22	脊柱外科	一院整形外	講師	慶應大	
	王艶	女	56・11・5	神経生理	生理学教室	講師	東北大	
90	侯麗君	女	56・11・26	血液内科	一院血液内	講師	東北大	91年3月末日本に赴き、今在学中
	劉緒田	男	37・12・12	一般外科	三院一般外	助教授	九大	
	劉士良	男	46・9	消化内科	一院消化内	講師	東北大	
	尹菊	女	46・10・12	産婦人科	三院産婦人	講師	九大	
	王沢興	男	34・9・23	病理学	病理学教室	助教授	慶應大	
91	馮戈	女	57・3・20	産婦人科	三院産婦人	講師	慶應大	92年3月末日本に派遣する予定、今出国準備中
	劉啓	男	56・8・19	消化外科	三院消化外	講師	九大	
	肖衛国	男	56・7・30	血液内科	一院血液内	講師	東北大	
	解強	男	61・11・28	心臓外科	一院心臓外	講師	慶應大	
	路振富	男	54・4・7	医学教育	日教育中心	講師	未定	

④ 91年度の研修生として選ばれた陳肖華は文部省の奨学金で日本に留学したのでその代わりに、路振富を推薦した。

2・研修員の帰国後の調査

1) 梁 再賦

(1991年9月27日現在)

氏名	英文	性別	生年月日(年齢)	所属先(赴日研修前)	所属先(研修後)
梁 再賦	Liang Zai -Fu	男	1957.1.2、34才	基礎医学部微生物学教室	同 前
職位	専攻(研修前)	専攻(研修後)		研修所属先	指導教官
講師	免疫学	同 前		慶應大学微生物学教室	多田隰卓史先生

研修期間：1989年3月26日から1990年3月26日まで

1・研修の評価

- (1) 医学免疫学の講義を見学しました。
- (2) 教室で行われた講座に参加しました。
- (3) 日本語の会話のレベルが高くなりました。
- (4) 免疫学分野の色々な実験技術を身につけました。
- (5) T細胞によるリンホカイン産生の調節という論文を日本東京で行った第20回免疫学会総会で日本語で発表しました。

2・研修中における問題

お互いに日本語で交流するチャンスがちょっと少ないです。

3・今の仕事

- (1) 日本語医学クラスの講義(免疫学)を担当する予定です。
(1992年3月から)
- (2) 日本語医学クラスの医学免疫学の教材編集のことを準備しているところです。
- (3) 今、中国の衛生部から5,000元の研究費をもらって Interlurekin-4の産生に対するMAGの影響ということについて研究しています。
- (4) 《英・日・漢免疫薬理学略語・用語集》の編集が終わって出版のことは相談中です。

以上

2) 李 厚澤

(1991年9月27日現在)

氏名	英文	性別	生年月日(年齢)	所属先(赴日研修前)	所属先(研修後)
李 厚澤	Li Hou-Ze	男	1933.4.6、58才	付属第一病院神経外科	同 前
職 位	専攻(研修前)	専攻(研修後)		研 修 所 属 先	指導教官
助教授	脳血管疾患	脳血管疾患+脳囊虫症		九大医学部脳神経外科	福井 仁士先生

研修期間：1989年3月26日から1990年3月26日まで

1・研修の評価

- (1) 神経外科において頭部外傷と脳血管病及び脳腫瘍の講義を見学しました
- (2) 日本語会話の能力は強くなりました。
- (3) 神経外科で行った色々なMicrosurgery手術を見学しました。
- (4) 海綿洞のような高レベルの手術法を習いました。
- (5) CT findings of Frish Paragonimiasis (脳肺吸虫症新鮮例のCT所見)を題として日本福岡で主催された第8回のアジア外科と脳神経外科連合会で英語で発表しました。
- (6) 自分で書いた“脳肺吸虫症新鮮例のCT所見”という論文が《日本脳神経外科》雑誌に決択され、1991年12月19日に発表する予定です。

2・研修中における問題

お互いに了解が不十分です。

3・今の仕事

- (1) 日本語医学クラスの講義(神経外科)を担当します(1991年11月から)。
- (2) 日本語医学クラスに適合する神経外科の教科書の編集を準備しています。
- (3) 講義中に使うスライドを作っています。
- (4) 顕微鏡を使って(microsurgery)松葉体区の珍珠腫と聴神経腫の手術を1例ずつやって良い結果を取めました。
- (5) JICAから提供された駒井式CT定位手術儀で、脳の重要な効能区においてbiopsyと腫瘍の穿刺及び血腫の溶血穿刺について研究の準備をしているところです。

以上

3) 任 玉鵬

(1991年9月27日現在)

氏名	英文	性別	生年月日(年齢)	所属先(赴日研修前)	所属先(研修後)
任 玉鵬	Ren Yu-Peng	男	1945.4.15、46才	付属第一病院泌尿器外科	同 前
職位	専攻(研修前)	専攻(研修後)		研修所属先	指導教官
講師	泌尿器腫瘍	同 前		九大医学部泌尿器科教室	熊沢 静一 先生

研修期間：1989年3月26日から1990年3月26日まで

1・研修の評価

- (1) 泌尿器科学の講義を見学し、教育手法を見習いました。
- (2) 中国の教科書を日本語に訳し、九州大学医学部泌尿器科教室の上田 豊史助教授にて、今訂正中です。
- (3) 第76回全日本泌尿器科学会、第42回新日本泌尿器科学会、第1回アジア泌尿器科学会、第7回新日本外科学会に参加しました。
- (4) 泌尿器科の色々な手術を見てきました。
- (5) 《新日本泌尿器科》雑誌に“83例膀胱破裂の総括”と言う論文を発表しました。(1990年10月号)

2・研修中における問題

研修のスケジュールは不明瞭と考えています。

3・今の仕事と問題点

- (1) 来年の3月から日本語医学クラスの講義(泌尿器科学)を担当する予定で今は準備中です。
- (2) 病棟と外来で患者さんの診断と治療を行っています。
- (3) 膀胱腫瘍、尿管逆流、尿失禁の診断と治療について研究中です。
- (4) 研究、診察、治療用の器具は不十分です。
- (5) 日本語のレベルを向上させる必要があります。

以上

4) 冷 重光

(1991年9月27日現在)

氏名	英文	性別	生年月日(年齢)	所属先(赴日研修前)	所属先(研修後)
冷 重光	Leng Chong-Guang	男	1951.7.22、40才	付属第一病院整形外科	同 前
職位	専攻(研修前)	専攻(研修前)		研修所属先	指導教官
講師	人工関節、 脊柱外科	人工関節、脊柱外科		慶應大学医学部 整形外科教室	矢部 裕 先生

研修期間：1989年3月26日から1990年3月26日まで

1・研修の評価

- (1) 整形外科分野の臨床講義を全部聞きました。
- (2) 指導教官の指導の下で患者さんの色々な病気を検査し診断しました。
- (3) 病棟の回診とカンファレンスに参加しました。
- (4) 脊柱外科の股関節の手術を見学しました。
頸部椎間板症とか脊柱すべり症とか脊柱すべり症と人工股関節置換術、
寛臼回転術などの複雑な手術を見学しました。
- (5) 日本語会話はもっとできるようになりました。

2・研修中における問題

- (1) 研修のスケジュールはあまりはっきりしていませんでした。
- (2) 言葉の問題はまだ存在していると思います。

3・今の仕事

- (1) 脊柱外科と股関節を専攻として研究しています。
- (2) 日本で習った頸部椎間板症を治療するために平林先生が開祖した片開式
頸椎管拡大手術をうちの病院の臨床に用いて、いい効果を取めました。
- (3) 研修中身につけた他の手術も将来の手術で応用してみたいと思います。
そして今、準備中です。
- (4) 日本語医学クラスの講義を一回行いました。今後、段々整形外科
分野の講義も担当する予定です。

以上

5) 王 艶

(1991年9月27日現在)

氏名	英文	性別	生年月日(年齢)	所属先(赴日研修前)	所属先(研修後)
王 艶	Wang Yan	女	1956、11、5、35才	基礎医学部生理学教室	同 前
職位	専攻(研修前)	専攻(研修後)		研修所属先	指導教官
講師	神経生理	同 前		東北大学生理学教室	丹治 順 先生

1989年3月26日から1990年3月26日まで

1・研究の評価

- (1) 生理科学の講義を聞きました。
- (2) 運動生理について、サルを実験対象としてよく訓練した後で、実験する方法を掌握しました。
- (3) 脳切片の技術を習いました。
- (4) 日本語の能力は研修前より高くなりました。
- (5) 1990年10月日本生理学会で《螢光トレーサによる視床の補足運動野投射細胞の検討》という論文を発表しました。

2・研修中における問題

- (1) 実験の周期が出来るだけ短い方がいいと感じです。
- (2) 研修旅行は前もってスケジュールを教えて下さったら、幸いです。

3・今の仕事

- (1) 日本語医学クラスの講義を担当する予定です。
(1992年3月から今は準備中)
- (2) 成立されたばかりの脳切片の研究室の仕事は一部担当しています。

以上

3. 92年度の研修員選考候補者

当大学は10名の候補者を推薦し、今度の面接試験を受けることとなった。

候補者の名簿（表参照）

4. 研修員の選考条件

- 1) 中国において出国人員の条件に満足したこと。
 - ① 大学を卒業してから勤務経験5年以上になったこと。
 - ② 大学院を出てから、2年以上働いたこと。
- 2) 日本に研修できるぐらいの日本語能力を持つこと。
- 3) 現在或は将来日本語医学クラスの授業を担当できること。
- 4) 年齢は40才以下。
- 5) 健康状況良好。
- 6) 主に40科目の中で選抜する。
- 7) 原則上、一つの科目では一人だけ選ぶ。主要科目（授業時間数は100以上）なら二回の機会を与えることを考えられる。
- 8) 40科目の中に含まれないが、医学教育に必要な科目でかつ日本語で授業を行う必要のある分野。
- 9) JICAのルートで派遣できない学科については次のルートで派遣することを考える。
 - ① 国費（EPT）
 - ② WHO
 - ③ 笹川奨学金
 - ④ 文部省奨学金
 - ⑤ 姉妹学校の交流
 - ⑥ その他

資料1

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 有機化学 責任者: 蘇鍾浦 記入日時: 1991. 9. 24

1. 経緯

1991年2月以来, 中日両方は教科書の作成については次の如く,

日付	手紙の著者	手紙の要旨
1991. 2. 10	蘇鍾浦	教科書の作成の頼み
1991. 4. 17	川又健	中国の訪問の時期の検討
1991. 5. 17	蘇鍾浦	中国の訪問についての答へと来年度教科書の作成の事と大ざねら
1991. 7. 9	川又健	教科書の作成の担当の確認
1991. 8. 7	蘇鍾浦	と有機化学講義要目と同封込、自分の目録の意見を出した。

2. 現状

既に作成した書類

1. 有機化学講義要目 中方蘇鍾浦が作成して、給山誠一と相談して検討したもの。
2. 有機化学講義要目 日方川又健が作成して、中方蘇鍾浦と手紙で相談したもの。

3. 問題点

教科書の内容は成るだけ、中国の現行の教科書と等しくおにすること考へる。故に、中方蘇鍾浦がわざと中華人民共和国衛生部の出版した有機化学教科書(第三版)と川又健君に送り親を。(1991. 8. 7郵便で)。日方はできるだけこの教科書の基本的内容を参考したと思ふ。

資料 I

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 有機化学 責任者: 蘇鍾浦 記入日時: 1991.9.24

1. 経緯

1991年2月以来、中日両方は教科書の作成については次の如く、

日付	手紙の著者	手紙の要旨
1991.2.10	蘇鍾浦	教科書の作成の依頼
1991.4.17	川又健	中国の訪問の時期の検討
1991.5.17	蘇鍾浦	中国の訪問についての答えと、 一度教科書の作成の事をたずねる。
1991.7.9	川又健	教科書の作成の担当の確認 と有機化学講義要目と同封込、 自分の得意の箇所を出した。
1991.8.7	蘇鍾浦	

2. 現状

既に作成した書類

1. 有機化学講義要目 中方蘇鍾浦から作成して、松山誠
一と相談して検討したもの。

2. 有機化学講義要目 日方川又健から作して、中方蘇
鍾浦と手紙で相談したもの。

3. 問題点

教科書の内容は成るだけ中国の現行の教科書とあうよう
にすることを考える。故に、中方蘇鍾浦がわざと中華人民共
和国衛生部の出版した有機化学教科書(第三版)と川又
健君に送りわたる。(1991.8.7郵便で)。日方はできるだけ
この教科書の基本的内容を参考したいと思う。

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 普通化学教室 責任者: 傅敬瑞 記入日時: 1991.09.26

1. 経緯

- 一. 普通化学大綱の講義要目は規定の通り(1990.11)完成し、夫々立場若くは、稲田若生、大倉多美子女仕に渡しました。如何に修訂するか、いま大倉女仕の返答はありません。(1991.9.26日まで)。ただ1991.7.女仕から「修訂中」とFAXが手に入ったばかりです。
- 二. 教科書の編集は女仕からのFAXによりまると多岐のゆえ、第一稿の採りたくは難いので中国医大傅先生に担当していただきとのことで、御助力はできません。
- 三. 実習書は1991.7末までで終って、大倉女仕は修訂すると返答されましたが、こちらタイプがでないので郵送することできない「ストップ」の状態です。
- 四. 中国医大当局及びJICAの諒解を得て、1991.9.0より当室は第一稿の基礎化学教科書を編修することになりました。

2. 現状

- 1. 実験実習書は91年7月にほとんど完了(譯者は金若石先生)。傅教授は三回審訂の手続きを経て、今はタイプ中。
- 2. 教科書は独立編修状態で、今の計画としては:

- 1). 資料の収集: 北京図書館で最新版(日本同大学の化学教科書及び参考書: 1985. ~ 1991. 現在まで)の本約110冊があり、重要参考になるものは9冊が適合し、ま約1000以上の図表、図解説明を造出したが、約30%のものが採り足りない。11月ないし12月解が送付する予定であります。(1991.9月)
- 2). 正式編集の洋装本業(マニュアルよりも詳しい)、6章はすでに完了、残る4章は10月15日に完成予定でいて。
- 3). 編修の始り: 91年10月15日 ~ 92年10月15日まで(教科書本文と校訂完了)と完成目標。

3. 問題点

1) 編集陣として(教科書)

著者: 傅敬瑞, 文系文章校正: 吳素英教授 其の他参加するものは6名。

* 大倉多美子女仕は92年度の忙しさを理由に共同編集は不可である故、スケジュール通りに実施することはできないと思う。

実習書: 譯者: 金若石副主任技師, 文系文章校正: 佐藤圭子(日本JICA派遣メンバー-義務的に助力)
審訂: 傅敬瑞

- 1). 日本同自治医大専長中野先生、間藤教授、石倉教授(化学)は1986年中国医大の要望に応じて学際の手続き交流として基礎化学の日本語化学教科書を作成しようとする意向を出して、具体的スケジュールまで進んだが、いろいろの原因で、特に中日教育センターの設置によって当初の計画は中止することになった。私の考えは学際交流として石倉教授と一緒に教科書の編集に従事して、多分独立編集よりも効果はあがるんじゃないかと思う、もしもJICAの方から助力をくだされば幸甚だと信じております。
- 2). 一般自然科学課程を強化するという方針は我が大学の念願で、現代化学(生物物理化学と機微分析)現代化学(生物物化学、生物医学化学)、教育、コンピューターなどの教養を更に高めると努力して居りますが、有機化学を除いて日本も門限(規制)の未済を期待して居ります。(全部5の教室)。

いままはJICAの御助力に対して衷心から感謝の意を申し上げます。

資料3

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 細胞生物学 責任者: 黄東陽 記入日時: 1991. 9. 24

1. 経緯 1991年の初め、慶応義塾大学医学部細胞生物学教授清水信義先生に細胞生物学教材の編纂について大学からの手紙を出しました。4月30日清水先生の返事が届いて来て、貴大学の教材内容「教育大綱」及び「マニュアル」はどうかと届いておきますと答えました。半日後、清水先生からもう一通の手紙が来て、7月中国医大を訪問し教材の作成について関心があるとの事で、その時相談することになった。7月初清水先生が中国医大で本教室の宇野田教授、黄東陽講師と相談して、可能な限り、ご協力致したいと思ひ、ととても忙いですが、みずから本を書くのは無理ですと思ひました。
2. 現状

1987年から日本語の細胞の生物学(第1版 監修 中村桂子・松原謙一、監訳 大隅良典等)の一部を使って来ました。

3. 問題点

1. 細胞生物学の参考書が少ない
2. 日本語の実習マニュアルが少ない
3. 教室に一台の日本語をtypeする簡単なワープロがない

資料4

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 医学遺伝学教室 責任者: 金春蓮 記入日時: 1991.9.25

1. 経緯

1990年夏頃 "医学遺伝学" 教育大新聞 JACSI に出ました。
その後 1991年4月18日 慶応義塾大学医学部分子生物学教室 蒲生 忍
先生に手紙を出してうちの学校で使用される教科書 "医学遺伝学" 授業
の要目 (前のをまた修改して) について直接紹介しました。返事は夏休
の後9月に届きまして内容は進める部分について相談しました。
9月20日また手紙を出して蒲生 忍先生とさらに検討中です。

2. 現状

92年9月 医学日本クラスの医学遺伝学授業があります。
使用する教科書は "医学遺伝学", J.S. トニソン 著, 田中 修 訳
講談社サイエンスライク. ほかの参考書は M.W. トニソン
principles of Medical Genetics (Thomas D. Gelehrter,
M.D. Francis. Collins, M.D., Ph.D.) の日本語訳書が
ほしい。

3. 問題点

1. この本は 1982年発行した本で "遺伝病の分子生物学的
機構や診断法, また遺伝子治療など" 新^{知見層が多い}~~内容が不足~~
2. 中国の教科書 "医学遺伝学" と全くあてはまらない。
3. 教科書外の参考書がほしい。

資料5

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 解剖学教室 責任者: 呂永利 記入日時: 1991.9.25

1. 経緯 1991年4月以来中日両方は教科書の作成については次の如く

日付	手紙の著者	手紙の要旨
1991.4.2	中方 中日医学教育センター 中方 呂永利	当方解剖学教科書の〈教育大綱〉「マニュアル」を提出して教科書の作成の頼を、教科書の作成のことまた「稿」を本年までに完成することを願う、中方の参加志願者を紹介すること。
1991.5.27	日方 川村光毅	中方からの教科書の〈教育大綱〉について日本語の用語、熟語につきcheckした鉛筆で書き込んだ。中方呂永利まで送ってきた。
1991.6.3	中方 呂永利	中日医学教育センターの計画により、教科書の作成のことは日方に依頼する。この教育大綱は参考として書いてほしい。

2. 現状:

- (1). 中方の使う〈教育要目〉は中方呂永利から作成した
- (2). 中方の日本語通学ガラスの使う教科書は《人体解剖学》(藤田健次郎著, 1964年, 医学書院出版)である(現在)

3. 問題点

- (1) できるだけ早く作成してほしい
- (2) 教科書の第一稿は日方に依頼することは再確認してほしい
- (3) 教科書の内容はできるだけ中方の教育要目を参考して、中国の現行の教科書と合うようにすることを希望。故に中方から中国の現行の教科書を(中国語)日方へ送ることは必要であると思ふ

資料 6

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 組織胚胎学 責任者: 石玉秀 記入日時: 1991.9.24

1・経緯 1991年4月9日 この教室は、日本慶応大学医学部部長先生
及田健次郎先生へ一書の手紙を出しました。その内容は、1991年3月20
日学校中日医学教材開発に關し、貴教室の及田健次郎先生の御協力をいただき
ました。御手紙をお伊見いたしましたか。今年の学校創立記念のと題の中日組織
化学の十傑、の共同編集有記をなすと商榷されました。及田先生、謝辞に
おこす。テキストはまた書かれて終わりません。

2・現状

この教室は、貴方の教材内容「教育大綱」(マニュアル)を提出した。本誌の
方、本誌の方の授業のテキスト、と中国語の大学のテキストを参考に、
教文の教材、中国語の組織胚胎学、二冊。(二種類)
第一冊: 全国教材編纂、成令忠 主編集(人民衛生出版社出版)
1989年10月
第二冊: 東北地区教材、尹昕 主編集(吉林人民出版社出版)
(高等医学院校教材)

1990年12月

3・問題点

- 貴方の教室は、この二冊のテキストは、貴教室の中日医学教材の格付けとしたほうがいい
と思います。
1. もし、貴校の中日医学教材は、教科書の形式で作成されたい方が一番いい。
マニュアル或は教学のプリントの形式が、授業の使用に
足りません。
 2. 貴方の希望は、貴校の教材を本誌の組織学と人体生理学の教科書を
作られていることです。
その内容は、中国の教育大綱として書かれていたことです。
 3. 貴校の日本語の方は、授業の教科書(中国語のテキスト)本が
一冊も無く、教科書大綱(マニュアル)の形式で作成されたいです。

資料 7

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 微生物学教室 責任者: 袁玉坤 記入日時: 1991.9.25.

1. 経緯

教科書の開発のために 中日医学教育センターの指示のように 私は 医学微生物学科の要項を書き 日本国へ寄りました。1991年 4月 26日 日本側対応責任者 深沢俊夫教授に 第一封手紙を書き 連絡しました。同年 5月 23日 深沢教授のお返事をお受けました。その後 深沢教授から 訂正のウイルス学についての マニュアルをお送りされたが 手紙の内容を 当方の指導者に 報告して 返事に 応じました。

2. 現状

- 1) 微生物学科の両方担当者がわかりました。又互に 連絡を始めて 日本国側 訪問中の時期が 1992年 4-5月に して 予定をたたく存じませう ということをお知らせしました。
- 2) 教科書の 第一稿を 当方でお書き下さい。日本側で 訂正加筆を 提出しまして 又 必要資料をお送りして下さい。
- 3) 当方教科書の 編纂組が 構成し 担当者 袁玉坤 洪文 藤川

3. 問題点

印刷と出版。

資料9

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 生理教室 責任者: 湯 浩 記入日時: 1991年9月25日

1. 経緯
5/12-91 日本慶応医科大学医学部生理学教室 植村慶一教授へ
連絡手紙を出しました。(1991年5月12日)

6/10-91 日本から 植村慶一教授の手紙を頂きました。それ
「... そのまゝの〈草稿〉は どちらで作製されるのでしょうか? それでなければ、どちらで
全部作製するのは大変困難です。日本語の教科書には優れたものが沢山あるので、改めて
中国向けのものを作る意味があるのか 疑問に思います。」と書かれました。

2. 現状
中国語の教科書(マニュアル)により、生理学の日本語の教科書の
〈草稿〉を考いております。つまり、草稿は昨年(90年)日本語医学
班に講義した生理学講義のノート を改めて整理するつもりである。

3. 問題点
日本への連絡は時間がかかるので 如何に
教科書を編纂するか、貴方ははっきりわかりません。例えば
植村先生の手紙には「... 簡単な講義の綱目を作ると
理解して良いのでしょうか? これと教科書との関係が良
く判りません。」とかかれました。貴方は ずっと 貴方の意見
を伺うことを待っておりますから、教科書の草稿を作る
ことは遅れてきました。

資料10

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 医学微生物・免疫学 責任者: 趙惠蓮 梁再斌 記入日時: 91.9.26

- 1・経緯 九一年四月中旬に慶応大学医学部微生物学教室の高野利也教授に手紙をよせ、教材開発のことをお知らせしました。5日目お返事をおもらいました。5月下旬に免疫学分野の日本担当責任者多田隈卓史先生に手紙をよせました(同封免疫学マニュアル) 6月下旬に多田隈先生のお返事をおもらいました。お手紙によつて 1. 執筆は中国方面担当とし、日本方面が補足する形にする。2. 免疫学マニュアルの補足もしました。このことです。

- 2・現状 医学免疫学のテキストの編集はもう初めです。趙惠蓮教授と梁再斌講師は担当です。1992年3月までに作成する予定です。日方専門家こちらにいらしている時に共同最終稿を作成します。

3・問題点

資料 11

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 寄生虫学教室 責任者: 王白鹏 記入日時: 1991年9月

1. 経緯

1990年11月28日、寄生虫学の教学綱要を日本のほうに送らせて、そして1991年3月に日本の慶応大学寄生虫学教室の竹内勤教授にお手紙を著して、お返事が今も返事をすることがありません。教科書を編集することについて、ご意見がいかかですかわかりません。

2. 現状

今は私達が中国の教学綱要によって、日本出版する「基本人体寄生虫学」(長花操名誉教授編)や「寄生虫学新書」(吉村裕之教授)や「人畜共通寄生虫症」(宮崎一郎名誉教授)等を参考して、講義を書きました。

3. 問題点

今も返事をくれませんから、中日医学教育センタープロジェクト教材開発の中の寄生虫学教科書をつくるのはたいへんです。

資料12

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 病理学教室 責任者: 淡生明 記入日時: 1991. 9. 24.

1・経緯 1991年4月中旬ごろ、日本慶応大学病理学教室、細田先生からのお手紙を頂戴しましたが、日本語教課書のことを、ぜひ知らなかつたかと言ふ。(でも、以前、日本語で作った教課書アウトライン、もうJICAに送っていました。)

1991年5月10日、慶応大学病理学教授、渡辺陽之輔先生は病理学分野の教課書を編纂のため、中国医科大学病理学教室に、来られました。教室の先生たちは、渡辺先生と教課書の編纂のこと、相談していました。

1991年、9月24日、病理学教室付主任、李宗鉉先生は日本に行つて、慶応大学の細田と会うつもりですが、その時、教課書の編纂の計画と方法を、共同審査しています。

2・現状

日本語医学班学生に授業のアウトラインについては、病理学教室の先生たちが、一年前、書き終りましたが、渡辺先生は、そのアウトラインの1/8部分を標準日本語に直してくれました。

本教室の王澤興先生は、日本慶応大学に日本語教課書を作るために、頑張っています。

3・問題点

来年9月、立派な日本語教課書が欲しいですか?

その時、よい教課書を取れないかもしれません。

資料 13

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 病態生理 責任者: 李和泉 記入日時: 1991.9.27

1. 経緯

1. "病態生理学教育要綱" は中方李和泉
常任が 1991年4月に作成しておりました。
2. 中日両方共同教材開発についてのことを手紙の
姿で 1991年5月 日本慶応大学 泰順-教授
に送りつけたが、近寄の手紙を待, 2週間。

2. 現状

日方泰順-先生の手紙を待, 2週間。

3. 問題点

日本語 クラス用教材としてはできな中国
の教科書にあるのと大差だと思;

資料14

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 薬理 責任者: 金石宝 記入日時: 1991年9月28日

1・経緯

教材開発に関して 1991年4月16日に当教室から慶応
大学薬理教室の山本助教授に手紙を出した。6月5日:
山本先生の返事をもらった。薬理学マニアルを山本
先生に作ってもらうことになった。

2・現状

山本先生が 1991年8月30日に 当大学にいられた。
学術交流の外の主に薬理学マニアルを作って
現在お大抵全部完成した。

3・問題点

教材完成が又誤り多きをしるべからぬこと
思ふ

資料 15

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 予防医学系 責任者: 金一和 記入日時: 1991. 9. 25

1. 経緯

1991年1月以降、中日両方は微生物教科書の編成について、
次のように進めて来ている。

1991. 2月、戴金成先生から東北大学医学部公衆衛生教授の久道茂
教授に中教科書の作成について頼み。

3月、中国側のマニュアルを作成して郵送した。

3月、中国の環境基準、食品衛生基準、労働衛生基準などを
参考にするとともに郵送。

2. 現状

中国医大予防医学系では教科書の作成の頼み、教科書のマニュアル、
参考資料を日本側に郵送したが、返事がない。

現在使用する教科書は、環境衛生学教授の金一和氏により
作成した日本語版《環境衛生学》のみで、教材はなく、中国の教
科書を参考に日本語で「講義するだけ」。食品衛生学は教科書
がない。

3. 問題点

連絡がないので教科書の作成について相談が
できないところである。

資料16

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 医学心理学 責任者: 李小白 記入日時: 1991. 9. 27

1. 経緯

- ① 1991. 5. 20 初めて手紙を出した (教科書を編纂する
の頼み)
- ② 1991. 9. 12. 第二回の手紙を出した (その手紙は受けたか
友いかどこととたす"おた
んこ)

2. 現状

いまだに"また"一回も手紙を返事していません。



3. 問題点

- ①. 当方の使う教科書はわか教研室の李鳴果教授が
書いた医学科学技術出版社の出版したものだ。——
《医学心理学》(Medical Psychology, 1985.)
- ②. 当方の教科書の中に三つの内容が分けられます。
A. psychology. B. psychiatry C. psychosomatic-
medicine
先方はできるだけこの教科書の基本の
frame (骨組) を含むようにすることを願います。

資料17

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート

(必ず日本語で作成のこと)

教室名：法医学系 責任者：賈静涛 記入日時：9月29日, 1991

1. 経緯

90年11月：中日医学教育センターは私が作った法医学の授業要綱を慶応義塾大学法医学教室柳田純一教授宛へ郵送した。

91年4月6日：私は柳田純一教授へ手紙を出して、教材をよく作る為に法医学に関する本を交換したい。年末までに教材を送ってくれるようお願いします。

91年5月21日：私は〈法医学概論〉、〈法医血型血清学〉、〈洗冤集録〉、〈英日中、日英中常用法医学詞匯〉等を柳田純一教授宛へ郵送した。

91年5月28日：柳田純一教授は返事してくれた。授業要綱の中に三の内容を増加したほうが良いということを書いた。

91年6月14日：柳田純一教授は〈標準法医学・医事法〉という本を送ってくれた。

91年6月20日：再び柳田純一教授へ手紙を出して、授業要綱の内容について私の意見を書いた。〈中国古代法医学史〉という本を同封した。

91年8月5日：柳田純一教授は手紙を送ってくれた。

2. 現状

〈英日中、日英中常用法医学詞匯〉は現在校閲を進行中です。

3. 問題点

教材を作る進展をよく知らない。

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 循環内科 責任者: 李廷富 記入日時: 91. 9. 26.

1. 経緯 90年で私は中日医学教育センターのお知らせを受けました。
そして、私は“中国教学綱要”の循環器内科の内容を月替りに
訳してから、日本国東北大学医学部第一内科滝島任教授に郵便で
送りました。91年5月日本国東北大学医学部第一内科嶺山先生が我が
学校に来られました。彼は滞在していた間、私の滝島任教授に送った
ものをマニュアル形式で書きなおしました。嶺山先生が帰国する時、
私と相談して、私はそのマニュアルの基礎に内容を加えて再び彼に送って
彼がまた一度書きなおしてから私に送って、このように2〜3回往復して
2. 現状 教材になるだろう。

日本国東北大学医学部第一内科嶺山先生の書きられた
マニュアルが20ページぐらいあります。内容がとて少ない。
今、教材もない。

3. 問題点

嶺山先生の書きられたマニュアルの内容が非常に少ない。
教材に比べて5%ぐらいだけですが、教材の筋だけでは、
教学にとりて不適合です。私は必ず教材の全部内容を編集
しなければならぬ。のこる95%内容を私の教室は今編集中です。

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名 ^{消化内科学} (第一附属医院) 責任者: 趙 毅 記入日時: 91.9.27

1. 経緯

中国の消化器学の消化管の部分と消化管以外の部分と腹膜腔管腔系
の部分の今までの講義は、この教材の各教章の項目を著者の中国の教科書
から日本に訳された。同時に関係作者に教材を編纂する件についてのお手
紙を出したお返事は今までの来ていません。
1991年4月16日から6月10日まで、大槻晋夫(消化器の講師)が来日して
前にもたが教材の編纂の件は、中国にから相談にたが書くとする。材料。

2. 現状

教材の編纂は上述の様にと進められた。たが、まだ存在します。
本編纂の準備中、中国の教材を参考にして、中国の
教材を著して講義に使用する。

3. 問題点

中国の教材を著してから中国の意見も取り、さらに研究の
編纂をする対策が、今の状況では3~5年が
この教材が完成するかどうかは、まだわかりませんと存在します。

資料 20

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 呼吸器内科 責任者: 康 健 記入日時: 1991年9月25日

1. 経緯

1991年4月26日 教材開発についての連絡手紙を日本に出したが いまでも返事を受け取っていない。

2. 現状

ことし 診断学(理学検査部分)の授業と内科学講義があり(進行中)。全国統一教材を基にして日本語に訳して講義する。

3. 問題点

1. 原稿は日本の専門家によって書かれることになっているので日本から返事がなければとまる。

2. 自分で教材を作成することは
語の力ゆえ面でも無理だと思ふ。

日本

資料2/

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 腎臓内科 責任者: 廣 祝三 記入日時: 1991年9月26日

1・経緯

中日医学教育センターの日本語クラスのテキスト開発の会議
内容によって わが腎臓内科が積極的に行なった。1991
年8月4日 テキストの第一稿とわが腎臓内科からたす腎疾患授業内容
に対するご意見のことについて手紙を日本東北大学第二内科吉永教授
にわたした。5月15日吉永教授からの手紙に上述の内容が書か^られたが
腎臓病学、診断学、治療学の3冊本が届いた。1991年6月4日再び
手紙をわたしたが返事しなかった。いま連絡中だ。

2・現状

日本から書いたテキストをまとめる中で テキストの修正の準備仕
事をいそいでやっている。

3・問題点

日本からの①マニュアルは授業メモ②として先生の授業用で
テキストではないならば 日本語の内科学テキスト開発クラスを組
成し、自分で書くのがよいだと思ふ これは中国の日本語内科学
テキストだ。

資料21

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 内分泌

責任者: 郎国 勉

記入日時: 1991年9月25日

1. 経緯

1991年5月^{まで}日方へのお手紙と計画表:

1. 内分泌教材の作成の頼み
2. この前我方利用した日本語参考書は上田英雄編「内科学」
でしたといふことを届け
3. 講座内容は仍りこの前の通り内分泌総論3時間, 甲状腺
機能亢進症3時間, Cushing症候群2時間^{と(まじょう)}
糖尿病4時間
4. 1992年3~4月中国の来訪の望み
日本方の答えが見えなかった

2. 現状

新しい教材は未だ作成していない
我方担当者郎国勉は71期の講座に用いた講稿をもつて準備している

3. 問題点

以新しい教材内容が出るまで中国の現行の教科書とあうように
することを考える。

以日本の出版した内分泌及び糖尿病に関する新しい参考書
は我図書館があるので, 講座と教材の作成を要するものを
早ければ早い程我が教室にのささかれば幸いですと思っております。

資料23

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 血液内科 責任者: 肖卫国 記入日時: 1991.9.25

1・経緯: 今年の四月頃に日本東北大学医学部の豊田謙隆先生に日本語医学クラス教材(血液内科部分)の共同開発についての手紙を出した。そのあと三週間ぐらいで「返事を受け取りましたが教材の共同開発ということをご承知したようで」両方とも協力しようと書いてありましたが教材第一稿はどこまで進んでいるかわかりません。ご連絡を持っているところです

2・現状:

来年の三月からもう日本語医学クラスの授業(血液内科)があるが専用の教材はないので中国の教材と日本語の参考書をミックスして授業の内容を準備しています

3・問題点:

日本語医学クラス専用の教材がないので講義には困っています

資料25

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 普通外科 責任者: 段志豪 記入日時: 9.9.26

1. 経緯

今年の五月に日本側の鳥巣要道先生に手紙を出して、日本側が教材の作成を担当するという頼みを同封した。

六月に返事を受けて、日本側の意図は「教科書の要目をもっと詳しく書く方がいい」ということである。議議要目はそれ以上詳しくはないから、まだ日本側へ手紙を出しません、(たぶん日本専門家がいればたぶん)

2. 現状

① 日本語版教科書の要目をもっと日本側へ取りまわすか(今年の五月)今、日本側はどれくらい作られたか知らない。

② 今年、四月～五月間の外科総論、9月の外科各論(ハル＝P版で)の内容が「抄授業されたが中国の教科書を基盤として、日文の外科学の本を参考して講義したのは現状である。

3. 問題点

日本側の要目は教科書要目をもっと詳しく書くことですか。そうすれば中国側が初稿を作成する、こととなる。

資料26

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 胸部外科 責任者: 胡永校 記入日時: 1991.9.28

1. 経緯

今年の四月下旬に九州大学外科第2講座、
杉山圭蔵教授への手紙をた"しましたか"、けど"
のまま"手紙の返事を"た"た"きま"せて"いた。

2. 現状

当教室には胸部外科の大綱を作成した
とこれに教育センターへおげました。
いま杉山先生からの返事をしを待っています。

3. 問題点

日方教材の編纂のことは早くよく知っていました。
もし問題点があったら、早く連絡するほうがいいです。
またその他の分野に深く交流したいです。

資料 27

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 心臓外科 責任者: 解強 記入日時: 1991年9月25日

1・経緯

今年の4月、日本語クラスの教材の編集について、もう、九州大学心臓血管研究施設外科部門の徳永皓一先生に手紙を出しましたが、いままじ、返事されませんでした。

2・現状

その教材のことは、今 ぜんぜん 編集しませんでした。

3・問題点

- 1) 早く日方から返事することが望ましい。
- 2) 来学期、再来学期の教授内容は、中日医学教育センターに置いてある日本語の専門参考書に参考してほしいです。
- 3) 困難があれば、マニュアルが内教室で編集してほしいです。

資料28

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 脳神経外科 責任者: 李厚澤 記入日時: 1991. 9. 28

1・経緯: 1991年5月21日に中日医学教育センター・プロジェクト教材開発についてのお手紙を九州大学脳研外科の福井仁士教授先生へ出しましたが今までに返事がまだです。

2・現状

実は1991年7月に九州大学脳研外科の藤井清孝助教授が中国医科大学に滞在する時に脳神経外科のテキストのマニュアルを残しておりました。だから返事がいらないです。

私は何回も読みました。植原鋒助教授と相談してあとに“このマニュアルによって他の脳神経外科学を参照して、共同開発のプロジェクト教材を書きます”と決めました。

1991年11月上旬に我方の原稿をすみませうと思っております。11月11日の授業は、この原稿を利用したようです。

3・問題点

資料29

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 実験所 責任者: 中野 詩 記入日時: 1991.9.28

1・経緯

日本において、実験所とこの名を字種と教員は、
設置人等から、中教を先ず教材の作成を促すこと
から、日本側專家の協力を求め、(字種と字種の作成)
修訂を完了する。中日医学教育センターの
6月14日 中教は、この以上の協議を経て、厚生大学
医学部中央検査部の入江先生に依頼して、先生の

2・現状

調査を伺ったことありました。

返事期待中。

3・問題点

中教をこの近年の講座用講義稿を整理し
教材を編纂し始めました。将来教材を完成する時、
日本側專家の御修正を願うことです。

資料 30

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 麻酔教室 責任者: 陳宏志 記入日時: 1991. 9. 25

1・経緯

1991年5月にこちらから麻酔学のマニュアルの初稿を完成しました。
このマニュアルを長野先生と何回相談して、具体的な内容を決めてい
ます。慶應大学医学部麻酔教室の福島教授、関口助教授の
手を加えて、もっと良いものになっています。

2・現状

ごとの11日に、関口先生は本教室にいらっしゃいます。
その時詳しく相談したいんですが、麻酔学の教録書
を完成することになります。

3・問題点

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 泌尿外科 責任者: 佐野明夫 記入日時: 1991年9月25日

1. 経緯

昨年、九州大学医学部泌尿器科教授の上田豊太郎教授がうす教室で3ヵ月間、滞在しました(90年9月20日-90年12月20日)。その時上田先生とうす教室の教授らとよく相談しました。上田先生帰国してから、私とで一回相談した後、そのうす教室の泌尿器科教授の原稿を日本語で再訳していただき、その原稿を上田先生に送りました。上田先生は快く受け取り、うす教室におくる予定です。

2. 現状

前回の3月には九州大学医学部泌尿器科教授から帰国しました。かえりから何回か上田先生と連絡しましたが、上田先生はなかなかいりません。現在原稿を返しています。今、何回か連絡中です。

3. 問題点

昨年2月からの授業が終わったので、教科書も完成し、問題集も完成しています。でもまだ原稿を返してうす教室におくっていません。

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 産婦人科

責任者: 柳陽栄

記入日時: 91. 9. 25

1. 経緯

1. 日本九州大学産婦人科に差しあけられた資料: 1990. 9. <産婦人科教育要綱>, 1991. 1. <要綱>中及び付録の
臨床分類と診断コト, 即ち<産婦人科学>と題した資料. 1991. 5. <婦産科学>(人民衛生出版社. 第2版)
2. 手紙往来: 1991年4月3日に手紙を差しあけ. 1) 自己紹介 2) 日本協臣大学2年生に産婦人科講義用マニアルの
編集をお願いし(1) (2) (3) 将来, その著者として系統的な産婦人科教師を養成する
1991. 5月3日に返事をいただきました. 1) 徹力ながらご返信をいただきありがとうございます. 2) マニアルはあはれ
ほかの産婦人科学と題した資料, その中で(4), (5) 理解できました. 3) 日本には産婦人科教師が
多岐多岐あり, 直接接点でありません. 4) 今後は どのどのようにならぬか, 具体的には
2) 現状
1991. 7に返事をいたしました. 1) <産婦人科教育要綱>を使い, <産婦人科学>を参考にし, 内容は
充実して下さい. 2) 用語とか概念の簡潔には相違がなければ中国の教科書に紹介していただく
と私が日本の教科書に入ります.

2. 現状

上の如き

ご返事を待つ所

3. 問題点

両国の授業方法は違いますが マニアルの(4) (5)については 只今手紙で交流するのは
なかなか困難です. それ 'マニアル' という外来語で 新授業内容を現わすことが
容易でよいと思いつき, 検討中. 他が国の授業方法を紙媒体で交換することがよくない.

資料34

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名 小児科教室

責任者: 岡本 教授 記入日時: 1991. 9. 28

1. 経緯

1. 1990年の秋、小児科の教材の概要を伺いお話を、日本医科大学医学部小児科教室の
幸田教授先生に送りお話を、その後二度目手紙が来たお話を、中心が「お話を」
ありました。

2. 現状

1. お話をには、日本 教材開発の資料帳の記と冊子同様にしています。
2. 1992年の日本語の教材の小児科の授業の記と冊子同様にしています。
3. 新しい教育方法を研究しています。

3. 問題点

1. 小児科の教材は、日中両国の間の交流が広がりますが、日本国のお話の現状がわか
らぬので、日本語の授業の記が乏しい。
2. 日本語の資料が少なくて、小児科の授業の記のためには役に立たないが、
特に小児科の教材開発する記は乏しい。
3. 教育方法は単一ですが、新しい方法で授業が広がりますが、授業を研究する。
4. 教材開発は日本式か、中国式か、教育方法が広がる教材が「お話を」
から教材、その式は「お話を」が「お話を」決められています。

資料35

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 耳鼻咽喉科学 責任者: 任重 記入日時: 1991年9月26日

1. 経緯

1991年4月 教科書の作成の事を左様なりました。5月頃上村卓也教授が返事して教科書の作成中と返事された。

2. 現状

1. 中方金濟霖教授から耳鼻咽喉科学講義要旨を作成して日本へ送られた。
2. 現在使っている教科書は耳鼻咽喉科学(河本, 1978年, 第1版)です。
3. 新耳鼻咽喉科学(切替-部、野村泰也, 1991年)或いは現代の耳鼻咽喉科学(檜学編、改訂第2版)を来年の教科書としてお願い致します。

3. 問題点

なし

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 眼科学 責任者: 張至林公 記入日時: 1991. 9. 28

1・経緯 1991. 4. 30 日本九州大学医学部眼科 猪俣孟教授
入手紙を出しまして教材開発に関すること
をお聞きいたしました。

1991. 8. 28 元々眼科猪俣孟教授の^{返事}によって
教科書の原稿を書くのは猪^俣教授ではなくて
いずれ教材開発のために教室長の^{同意}を依頼する予定です。

2・現状

わか教室から教科書の〈教育大綱〉を提出しまし
たが 現在 日本側の教材原稿をお待ちしてい
ます。

3・問題点

日本側の教材原稿をまだとどいていなくて詳しい
ことはよくわかりません。

教室名: は脊科学 責任者: 楊景春 記入日時: 1991.9.25

1. 経緯

1991年3月日本側教科書作成のため、は脊科学各病変の分類と診断ポイント(マニュアル)を医学教育センターに出した。同年4月中旬日本九州大学医学部 堀嘉昭教授に紙を出して、教科書の作成頼みました。但し今迄返事が無い。

2. 現状

我が教壇は1982年から1989年まで"5つぐラスのは脊科学"を講義した。講義するため詳しく講義手稿が書いてありました。主な参考書は次の様

- 臨床は脊科学 伊崎正勝
- 小は脊科学 上野賢一
- 標準は脊科学 医学書院
- 基本は脊科学I-III 小嶋理一
- は脊科学(中文教材)

3. 問題点

1. 日本側 は脊科学教科書 或はマニュアルを作成頼みます。

2. 次の参考書は以下の

- カラーフォト は脊痛(全5巻) 金原出版株式会社
- 現代は脊科学大系 中山書店
- カラーアトラス 女性黒色腫の臨床 医学書院株式会社
- は脊痛組織アトラス 東江堂

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 放射線科 責任者: 何芳显 記入日時: 1991. 9. 24.

1. 経緯

1. 91. 中国 現在使用中の教子プログラム 及び診断のポイントと日本例の専門家へ郵送.

2. 91. 5 九州大学医学部 放射線医学教室の蓮尾金博先生 短期専門家として来院. 6月帰国前 放射線診断子のプログラムを作成完了.

3. 91. 7 一矢有一先生来院 放射線診断子の作成に関し相談
内容: 蓮尾先生の古いプログラムを基礎にして 具体的内容の増加に一致の意見を得る.

2. 現状 4. 91. 8 増田康裕教授の御返事: 91. 9 末に蓮尾先生の内容を4倍に増加して中国側に送ります. 来月の教子に関し会いおこな.

今、日本例の新しい教科書の刊行を待っている.

今回増田教授が持ってきてくださると聞き.

3. 問題点

一矢先生の意見では 日本例の担当は 上述の内容よりだけ

後は中国例で内容を増加して 最後の定稿とする.

資料40

中日医学教育センター・プロジェクト教材開発の中間アンケート
(必ず日本語で作成のこと)

教室名: 核医学教室 責任者: 羅錫圭 記入日時: 1991. 9. 27.

1・経緯

今年、五月に始めて日本九州大学医学部の増田康治先生に手紙で連絡しました。その後、六月始めから九州大学医学部一矢有一先生は短期専門家として、うちの教室で二ヵ月間に勤めていました。七月に一矢先生は羅錫圭先生とともに日本語クラス用に「核医学マニュアル」を編纂しました。この初稿は七月廿四日における完遂されました。

2・現状

初稿の核医学マニュアルは今年九月に73期の日本語クラスに使われています。

3・問題点

そのマニュアルの内容は核医学教育の発展によって核医学の発展によって、不断に充実しなければならぬ。